

---

# メガロマニアックス——フォーゲット・ミー・ノット——

病木 双葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メカロマニアックス——フォーゲット・ミー・ノット——

### 【Nコード】

N7805K

### 【作者名】

病木 双葉

### 【あらすじ】

フォーゲット・ミー・ノット——脳内図書館新書ボックス二十七列目。その一角に無造作に詰まれている中に、この情報が置いてある。昨日、本で読んだ。

いやはや全く、勿忘草の花言葉も知らない奴がサヴァンだなんてのは、世の中笑い話にしかないってモンだ。

夢を見た。酷く、脆い、惨い、不可思議で不安定で不明瞭な夢。

現実と輪郭の重複さえ感じさせる程に妙なモラトリウム。

その日、僕は自分の命を天秤に乗せていた。

『ねえ、まこちゃん』

『なにさ。あとまこちゃん言うな』

『明日世界が終わっちゃうとしたら、まこちゃんは何する？』

『とりあえず、大事な人を助けるかな』

『どーして？』

『それはね——』

サミュエル・ジョンソンの言葉だ。

最高に青臭い。

けど。

けど——僕はこの言葉が好きだ。

ともあれ僕は、この夢に勿忘草の名を付けた。

フォーゲット・ミー・ノット。

私を忘れないでと哀しそうに言う彼女の顔を、他ならぬ僕自身が忘れぬ為に。



空想との境目を失った世界。妄想都市だ、と彼は一人で呟く。

絶対記憶能力を持つ少年、虚偽真。

機械として生きてきた彼に色彩を与えた少女、篠崎群青。

校内随一の変人カップルと名高い彼ら。

その友人、浅間宗助は虚偽にこう言った。

「エニグマって知ってるか」

曰くその名が指す処は、？天才だけを狙う猟奇殺人鬼？であるという。

次のターゲットとなる可能性が高い彼らの前に、案の定現れた殺人鬼エニグマ。

かくして世界の真ん中を護るべく、少年、虚偽真の戦いが始まる。

だがその先で手招いているのは、死よりも重く暗い、サヴァンにあるまじき結末で――？

# 01 BLUEBELL JUNKIE (前書き)

これが無理だったら他の作品は大体無理です。

その時は病木双葉に別れを告げて、常識人としての生活を全うして下さい。

読める奴だけついて来い、てな感じで。

## 01 BLUEBELL JUNKIE

フォーゲット・ミー・ノット——脳内図書館新書ボックス二十七  
列目。その一角に無造作に詰まれている中に、この情報が置いてあ  
る。昨日、本で読んだ。

いやはや全く、勿忘草の花言葉も知らない奴がサヴァンだなんて  
のは、世の中笑い話にしかないってモンだ。

夢を見た。酷く、脆い、惨い、不可思議で不安定で不明瞭な夢。  
現実と輪郭の重複さえ感じさせる程に妙なモラトリウム。

その日、僕は自分の命を天秤に乗せていた。

『ねえ、まこちゃん』

『なにさ。あとまこちゃん言うな』

『明日世界が終わっちゃうとしたら、まこちゃんは何する？』

『とりあえず、大事な人を助けるかな』

『どーして？』

『それはね——』

サミュエル・ジョンソンの言葉だ。

最高に青臭い。

けど。

けど——僕はこの言葉が好きだ。

ともあれ僕は、この夢に勿忘草の名を付けた。

フォーゲット・ミー・ノット。

私を忘れないでと哀しそうに言う彼女の顔を、他ならぬ僕自身が  
忘れぬ為に。

最初に前述しておくが、この話は夢オチだ。

生まれの日は覚えていない。覚えても意味が無い。誕生という物が存在証明の確立を意味するのであれば、僕の誕生日はあの日、罪を知る事など知らぬ程に幼すぎたあの頃、彼女に出会い、彼女が僕の世界の中心となった日——その日こそが、僕の誕生日<sup>バースデー</sup>となる。

——レインマンという映画を見た事がある。とある？病気？の持ち主の話で、その男は、電話帳の番号を一字一句逃さずに記憶したり、バラバラに落ちたマッチの個数を一瞬で把握したりする事が出来る。担当医に勧められて初めて見た時、僕はまだマシな方だと思っ

った。

「あーちゃん、これ」

「んー」

夕暮れ時の生徒会室に、僕、虚偽真<sup>いつわりまこと</sup>とあーちゃん——篠崎群青<sup>しのざきぐんじょう</sup>は二人で居座る。秋口にしてはやや肌寒いその季節に、在ろう事かこの部室はヒーター着火の許可が降りていない。ラムネを焼いた部員の所為で、職員方から悲惨なまでに怒られ、無期限の使用停止を命じられた。

「はい、次のアンケート」

「ん」

空想が支配する世界。いつからそうなったのかは知らない、ともあれこの世界は、空想との境目を失い始めていた。ありとあらゆる超常概念は日常茶飯事だ。

メガロポリス

僕は勝手にこの街を妄想都市と呼んでいる。その中の御園東高等学校。早い話が？進学校？という奴で、エリートの溜り場だ。最も、進学校なんて謳われているが、実際はそう頭が良い訳ではなく、上下差が激しいだけ。その一部ばかり世間に出るから、進学校のイメージが纏わり付く。ピンキリだったのに。

話は変わるが、高校生活の楽しみは？と聞かれて？幼馴染と生徒会の残業？なんてふざけた答えを返す奴はまず間違はなく真人間ではない。少なくとも生態系の範疇からは除外しても問題無いだろう。アニメの見すぎか、でなけりゃゲームのやり過ぎだ。

「あと何枚あるのさ」

「……………百四十八枚」

「……………はあ……………」

メランコリニスタ気取りで溜息を吐いた所で何も変わらないのに、この戯けた人間様の精神と来たら如何な物やら。

「溜息を吐くと幸せが逃げるんだよ」

「じゃあ人の溜息を吸うと幸せ一ポイント分が増える訳だ」

「すうっ」

「くそっ……………一ポイント取られた……………」

戯れがてらに眺める用紙の束。バベルが如く積まれたそれは僕らの仕事の遅さを物語っていた。

「本当に終わるのかこれ」

仕事は至って単純な物だった。生徒会宛に送られてきた学園祭の意見を見て、それを報告書に書き写すだけだ。どいつもこいつも真面目に仕事をする気は無いのだろうか。

「え……………学園祭のテーマが酷すぎます。何とかありませんか、だと。畜生、それならお前らが積極的に意見出せば済む話だろうが」



「まこちゃん、今年のってどんなだったっけ？」

「雑草魂」

「うわあ……」

「言うなよ、僕は全力で反対したんだ。なのに副会長の奴がなあ」  
不条理だ。

世の中は得てして不条理だ。一分の例外も無く世の中は不条理と不平等に満ちている。いや——不幸という点においては確かに人類皆平等だろうけれども。

先天的な障害がそうだ。こればかりは誰を攻める事も出来ないし、攻めたとしても救われない。分かっているからこそ、それを持って生まれた本人は一生一緒にそいつと共生しなければならない。或いは、僕も。また、彼女も。

「ううあああああああああ！ あんまりだあああああああああッ！」

「落ち着きなよ、まこちゃん……」

発狂する僕に対して淡々と書類に目を通す彼女。どちらが人間として出来上がっているかなど一目瞭然だった。殆ど黒となった空に映える蛍光灯の光が、淡い群青色を照らし出す。美人という言葉が最も似合う女性だ、少なくとも僕の知る限りは。群青色のロングヘア、綺麗な睫毛、細い足。いや、最後の要素が一番重要だから、マジで。

僕は一年、彼女は二年。つまり一つ年上の先輩に当たる。自分で言うのもあれだが、頭脳にそれ程差は無いだろうけど。

「ねえまこちゃん、もう七時だよ」

「よし、続きは家で」  
「うい」

たまには定時上がりのサラリーマン如くクラウチングスタートの準備をして、五時のチャイムと共に全力ダッシュで帰宅したいものだ。

まあ、この時間が心地よくもあったりする訳で。



個人入学式から僅かに一週間にも関わらず、存外環境には馴染める物だった。恐るべし人類の適応能力とでも言うべきか、ともあれ僕は編入したての新入生だ。

その特別入学は、僕の有する？能力？による物だった。

前述したが、この世界で超能力者などは珍しくも何とも無い。スプーン曲げだの靈感体質だのは、電車に乗れば一人はいるレベルだ。僕が保有するのは？圧倒的記憶能力？という物で、一度見た風景を絶対忘れないとか、所詮はその程度で、別段何に使う訳でもない。強いて言えばテストぐらいか。勿論、代償はあるが。記憶のポジションが脳内で肥大する代わりに、別の機能を司る脳内を侵食していく。人間的な何かが欠如するのだ。

生まれた瞬間の光景までは思い出せないが、脳が発達し始めた二歳頃からの記憶なら全て鮮明に思い出せる。始まりは両親が僕に絵本を読ませていた時だった。その全てを頭に刻み付け、両親の前で朗読したのだ。その後も同じ事が三、四度続き、不思議に思った僕の母親が病院に連れて行くと、その診断結果は下された。

サヴァンですね、と。

「あ、まこちゃん。私買い物してから帰るね」

「それなら僕も行くよ」

そして両親は気狂いになった。

科学に興味があった僕は次から次に元素記号の本や化学反応の本を読み漁った。けれど両親は僕の求める方向と真逆に進んでいった。最初に両親が読ませたのは国語辞典だった。懐かしいな、広辞苑

を全部暗記したのは六歳の時だった。

次に読ませたのは数学の参考書。授業中にやる事と言えばコンパスで模様を描く事ぐらいだった。

その次にはジーニアス英和辞書。いつ渡米しても生きていけるだろう。

そこまで来て僕の頭は焼き切れそうになった。いや、脳に限界が来た訳ではない。単純に精神の問題だ。面白くも無い書物を延々と読んだところで何の足しにもならない。少し考えれば小学生にだって分かる。ともすれば、あの頃の両親は小学生以下の思考に成り下がったエゴの塊だった訳だ。合掌。

両親の病気はエスカレートしていった。

日本文学は好きだったから苦も無く全て頭に入った。

ごめん嘘、今の無し。無理に決まってるでしょあんな物。お次は外国文学だった。プロレタリアなんて物を小学三年生に読ませようとする奴の気が知れない。触れているとかしか思えない。

徐々に症状は悪化していく。もはや奴らの口は傲慢の為だけにあった。

そうして価値の欠片も無い今までを過ごし、こうして自我の欠片も無い今を過ごし、そして意味の欠片も無いこれからを過ごす。生ける屍、か。否——屍は？生きていたモノ？だ。生きてさえいなかった僕にその称号が適用される事は許されてはならない。

「今日は何を買うのさ」

「カレーを作りまっす。玉ねぎと人参と牛肉とじゃが芋かな」

「温野菜じゃん」

「あ、カレー粉ね」

幾ら絶対記憶だろうと頭が弱いんじゃない意味が無い。ああ、否、この場合の絶対記憶は学力とは別物であって——ってそんな事はどうでもいい。

篠崎群青は僕の姉である。

いや——姉と言っても苗字の相違から読み取れる様に、本当の姉

弟ではない。義姉という奴だ。或いは、隣の家に住む姉貴分、と言う方が正しいかもしれない。

最初に出会ったのは六歳の時。行き場を無くした篠崎群青が隣の家へとやって来る事になった。腐れ縁という奴だ。

同類相憐れむと言うか類は友を呼ぶと言うか、互いにサヴァンという事もあるって、お互い順応するのに時間は対して掛からなかった。僕は彼女を「あーちゃん」と呼び、彼女は僕を「まこちゃん」と呼んだ。不本意ながらに——ごめん嘘、今の無し。

「ポイントカードは宜しかったですか」

「あ、お願いします」

レジの電子板に数字が表示される。

合計で二十四個。金額は四千と二十三円。そのぐらい暗算しろよと言いたくなるけれども、相手は常人だ。サヴァンと同等の基準を求めるのは無理がある。

「ねえまこちゃん」

「なにあーちゃん」

「しりとりしようか」

「いいよ」

「みかん」

「待てよコラ」

何がしたいんだか分かりやしない。天才ってのは得てしてそんな物だ。卓越しているとまでは言わないが、名言を引用するならば、「天才というのは須らく社会不適合者である」という奴だろうか。

「っていうかさ、あーちゃんカレー作れる？」

「カレーぐらい作れるよ……」

「そう？」

家の前に辿り着く。

『篠崎』と書かれた表札と『虚偽』と書かれた表札が並ぶ。ぼーっとそれを眺めていると、篠崎家の方から何かの破碎音が聞こえてきた。

「……大丈夫？」

「何が？」

「……いや、何でもない」

家庭の事情を把握していない手前、下手に首を突っ込む訳にも行かない。何かがどうかしているのは確かなのだが、状況は動かせない。天才なんてこんな物だ。

大体、そういう奴らの家庭ってのは、そういう奴らが多い。僕が言ってる意味ぐらいは、サヴァンじゃなくても分かるだろう。

「それじゃまた明日ね」

「うん、また明日」

何事も無いかの様に平然と家の中へと入っていく。

再び聞こえる破砕音。

「――」

篠崎群青の母親は十年程前に死んだ。呆気ない交通事故だ、神様は真摯に生きている人間を蹴落としたがる。他人の不幸を傍観するのは最大の享楽、と何処かの下衆がほざいた様に、神様は享楽に耽っているらしかった。真偽は闇の底だ。第一他人を気に掛ける場合でもない。

破砕音の正体は何なのだろうか。

――いや、その勘繰りを不躰と言うんだ。他者を憂う権利は僕に無い。

僕もまた魔物の巣窟へ自らを踏み入れようと言うのだから。

「……ただいま」

醜惡な狂気の臭いがした。



安らげない故郷を故郷と呼ぶのだろうか。

定義を決める権利は僕には無い。我ながら無い事尽くしだが、それくらいは自覚している。

けれど――少なくとも安息の無い世界を平和とは呼ばない様に、安らげない家を家とは呼ばないのだろう。言わずもがな僕の家は煉獄に等しい。さながら狂気に滾る様な絶叫。とても人間の口から発せられるとは思えない醜悪な言葉。殆ど刃となって突き刺さるその腐食した錆びた刃。

ともあれそういう事だ。家に帰ると書置きがあつた。『机の上にある本を四〇二ページまで読んでおいてね』だと。畜生。

「なんだこりゃ……」

本をめくると新約聖書。とうとうキシタンに走り出したか、人もここまで落ちると一種の耽美ささえ感じさせる。腐りきった生物に果たして生物という称号を与えるだけの価値があるのだろうか。最も、両親の場合は腐っていいようにがいまいが元から名前を与える事さえ勿体無いぐらいのクズだけでも。

「ペテン師だ」

キリストは預言者であつて神じゃない。イカロスの話と同じだ。人の身でありながら太陽に近付きすぎた物は蠟の翼を奪われ地に落ちる。人の身でありながら大衆に持ち上げられて神に近付きすぎた物は道理に倣って失墜する。挙句の果てが磔刑だ。クオ・ヴァ・デイス

「原罪ねえ」

クソ喰らえ。裏に見えるのは信仰と救済ではなく背徳と陰謀だ。人の所業に有る訳が無い。

壁へと聖書を投げ捨てる。

無理だ。

こんな物を朗読する奴の気が知れない。辞書に猜疑という単語が無い大馬鹿野郎か、聖人君子でなけりゃこんな物はまともに読めない。

「さてと」

晩御飯はまたしても碌でもない冷凍食品だった。全く冗談じゃない。健全な高校生の生活とは到底思えない暮らし振りだ。勿論、一人暮らしに比べたら幾らか良いのだろうけど。出来ることなら一人暮らししたいが、ウチの両親はそれを許可しない。

朝起きれば神に祈り、僕の容量を改変し、都合の良い事があれば神を崇める。

何故って？

知るかよそんなの。

だって気狂いだもの。

そうとも。もしこの世に兵器が無かったら、人を殺すのに一番適した物は多分――

？――？だな。

戯言がてらにそう思って、一笑に付して、聖書をゴミ箱に投げ捨てた。



目覚ましが爆音で騒ぎ立てた翌朝、間が良いのか悪いのか知らないが、僕は篠崎群青と一緒に登校する事になった。そりゃ家がお隣で学校も一緒なんだから当然だが、少なくとも間が良いとは言えない。

只管に無言。

「……………」

「……………」

無言で只通学路を並んで歩く。会話が見つからない。

「……鉄臭いね」

「……うん」

鉄臭い、というよりは血液臭い、だが。どっちにしろ鉄分が変わりは無い。そう、例えるならば、錆びた鉄独特の、ざらついた臭い。

「……ああいう死体の事、鮪って言うよね」

「……電車の人身事故だね。でも正直今言わないで欲しかった」  
空気が重い。

先刻から僕ら二人を取り巻く妙な齟齬は、交通事故の現場に遭遇した事によるものだった。勿論スプラッター映画を見た事が無いとは言わないが——それにしたって惨状は悲惨だ。まして彼女は種類の映画に耐性無いのだろう、顔色は殆ど蒼白だ。

「……大丈夫？」

「ねえまこちゃん。人は死んだらどこに行くんだろうね」

哲学で人が救えるかよ、と思ったり。

補足までに、篠崎群青は校内随一の変人として知られている。容姿端麗、校内模試は常に三位以内、ところが天然の馬鹿。次いで奇人。僕には全く理解出来ないが、そりゃ一部の変態共が狂気する訳だ。

ごめん嘘、今の無し。実は僕もその変態の一人。

「多分ここじゃないどこかだよ」

「そんな事分かってるよ……それがどこか聞いてるんじゃない」

「脳が死んだら思考も出来ないらしいから、存在が消えるんじゃない?」

成程、存在の剥奪、て訳だ。

「面白くないなあ」

小石を蹴り飛ばしながら唇を尖らせる。

哲学なんてのは只の言葉遊びだ。語りだしたがる阿呆に決まって頭のレベルは大した事は無い。偏見と独善に満ちたエゴイズムの塊だ。それは僕自身よく知っている。いつかの己がそうであった様に。今でも、か。



「……もし死んだらどう思うのか、ってのは興味あるけどね」

「死んでみれば？」

「酷ッ」

「畢竟、まこちゃんが死んだって世界は動かないのです」

サヴァンに見られる感情の欠落。他の場所がやられなかったただけ良好としておくべきだろう。下手すれば僕は一生歩けなかったかもしれないし、一生目が開かなかったかもしれないのだから。

篠崎群青には？——？が欠如し、虚偽真には？——？が足りない。全くとんでもない話だ、どこぞの三文小説じゃあるまいし、そんな微妙な設定は現実世界に必要な。才能は諸刃の剣とはよく言った物で、サヴァンなんか何の足しにもなりやしなかった。

「でも死ぬのは困ります」

「僕だって困るよ」

「存在しない再会って悲しい話だねえ、まこちゃん」

「いや、死なないからね」

戯言を受け流すのに感傷は必要ない。否が応でも顔を合わす人間に言われたところで、どんな心揺らす衝撃が来る訳でもないのだから。

「それじゃ、また放課後に」

「はい」

一年二組と二年四組。校舎の一階と三階、一年が一階、二年が三階。

つまり用事の際には階段を往復しなけりやならないのだ。

「……まあ、面倒ではあるけど」

それがまた居心地良いと言うか。朝早く来て教室で一人でボーッと物思いに耽る。何とも言えない汚濁した青春の一欠片。青い春なのに汚濁——は、笑えない冗句。

太陽が徐々に明るみを増していく。世界で一番ハッピーエンド。そしてなんて事も無く、憂いと共に一日が始まった。



篠崎群青は黙考する。

サヴァンという付加価値を抜きにしたら、もしかすると私達——虚偽真や篠崎群青に生きている意味は無いのではないかと。

彼女の両親は比較的まともだった。比較的、というのは当然ながら同じサヴァンである、虚偽真の家庭と比肩して、だ。

「……」

母親がまともな分、まだ助かった。父親は単純に性格が悪かった。早い話、強制的な記憶は然程無かったのである。父親が何かさせようとしても、母親が止めていた。

「はい、じゃあこの問題を——篠崎さん」

問題は至って単純な物。モーセの十戒を端的に答えよ、という記憶力任せの阿呆な問題だった。それこそ意味が無い、と呟きつつ、篠崎は頭を探る。

「ちょっと待って下さい」

脳内回路を探り当てる。あつた——五日前の授業だ。脳裏に浮かぶノートに描かれた十個の文章。文字列の鮮明度を拡大、羅列を解きほぐし解答。

「一、貴方は私の他に、何者をも神としてはならない。二、貴方は自分の為に、刻んだ像を作ってはならない。三、貴方は、貴方の神主の名を、妄りに唱えてはならない。四、安息日を覚えて、これを聖とせよ。五……」

一から十までを淡々と暗唱する。全員が驚愕しているのだろう、視線が篠崎群青を釘付けにする。机にノートは無い。有るのは磨耗しきった教科書とサイコロが二つだけだ。

「……あー……はい、座っていいです」

沈黙と静寂。クラスで大した位置を占めていない人間が当てられた時の様な虚無と閑散。

「……………」

馬鹿馬鹿しい。サヴァンなんて大した物じゃない——こんなのは只の持ち腐れだ。

首筋に刻まれた一筋の傷跡を弄りながら、サイコロを弄ぶ。

「うん」

頭の中で結論が出た。やはり私達二人の価値はサヴァンという一点だけだ。唯一のアドバンテージにして存在証明。

まあ、意味無くたって生きていけるんだけどね、と。

少女は、群青色の空を見上げて呟く。



——つい一時間前の話である。

丁度四時間目の数学、今やっているのは所謂「集合」という奴で、ともすればこれは日本語の問題なのだが——まあ、それは置いておこう。

兎も角そんな折、隣の席の大馬鹿野郎——比喻ではなく文字通りの大馬鹿野郎——が僕に話を振ってきた。

「おい眼球野郎」

「浅間か。追試の勉強はしたのか？」

「お前——昨日送ったメール見てないだろ」

そういえば出会い系サイト勧誘メールに混じって一件来ていた気がする。しかしこいつは飽く迄只の変態野郎、ともすればそのメー

ルはスパムメールやスパイボットより性質が悪いので、迷惑メール以上にゴミ箱候補として優先されなければならない。

よって僕はそのままメールを消去したのであった、完。

「……てめえなあ」

眩きながら、不快そうな顔で黒板を書き写す。

名簿四番、浅間<sup>あさま</sup>宗佑<sup>そうすけ</sup>。染められた金髪の上にあるニット帽は、授業中でも外される事は無かった。俗に言う問題児だ。

「お前から来るメールが成人指定じゃなかった試しが無い」

「俺の人生は全年齢対象だっつーの」

あれ、冷静に考えれば授業中だよな今って。

「おい虚偽、浅間、お前ら何喋ってんだ」

遅かった。気付けば周囲の人間全員が聞き耳立ててるじゃありませんかファツキンジーザス。冷や汗伝う僕らには構いもせず、数学担当の松井先生は怒気を張り巡らせる。

「何喋ってたんだって聞いてるんだよ」

なんてことは無かった。

ああ、周りの静寂が痛い——切り抜けなければ。

「え……いや、大した事じゃ……」

「喋ってたろうが」

「……長くなりますよ?」

「言ってみろ」

言ってみろ、なんて言わなきゃ良かったのに。勿論そこは?虚偽?の名を騙る虚偽師、まともな対話をする気など毛頭無いが。

「3. 141592653589793238462643383  
279502884197169399375105820974  
9445923078164……」

「……」

「円周率を暗唱してたんです」

「……」

昼休み、職員室に来いとお呼びが掛かったのはのは言わずもがな。

——で、今に至る。

今は昼食時で、これを食べ終えたら僕は職員室に行かなければならない。

「で？ 何で円周率なんて暗唱したんだよ？」

「何でって、別に。ちよつとスパニツシュヨークを効かせただけさ」

「訳わからん。病気じゃねーのかお前」

正解だよ浅間、病気と言うには聊か度が過ぎるが。弁当箱の魚フライを突きなが浅間は猜疑の目を向けた。サヴァンってのはこれだから駄目だ。バレてないのが幸いか。どうかな、或いはとっくの昔に。

「僕からすればお前の方が病気だよ」

「？ 俺が？ 何で？」

ベルナディック  
「聴覚異常」

「……クソの役にも立たねえよ」

目を細めて言って、浅間は弁当箱を片付ける。

類は友を呼ぶ——僕の周りには何かと変な奴が多い。篠崎群青に加え、浅間宗佑、おまけ程度に浅間宗佑の妹も加えていいだろう。

絶対記憶ことイディオ・サヴァンと異常聴力ことベルナディック——どっちがより頭がおかしいかと言われれば、僕は間違いなく後者を推す。何故って、僕の世界にそういう概念が無いからだ。

「お前、この間さ、トラックが通った時に呟いたろ」

「何て？」

「？ スモーク・オン・ザ・ウォーター？。ディープ・パープルの曲じゃないか」

「……………ああ、言った様な言わなかった様な」

「あんな轟音でトラックの中の曲が聞こえてたまるか。テストの度に僕に？ 病気だ？ って言ってるけど、僕からすればお前の方がよっぽど病気だよ。どんな耳してるんだか」

まあ、両方とも病気には変わらない。

「……実はな虚偽、この間から——」

会話はそこで中断された。空氣的ではなく、状況的にだ。

その突然の乱入者に一体何人が目を見張った事だろうか知れた物ではない。校内随一の変人を謳われた容姿端麗の我が近所さん、篠崎群青が突入してきた。

「失礼します！」

そりゃもう、凄い剣幕で。

「……げ」

「ん？ あれって二年の……」

黒い長髪を振り乱し、早足で歩み寄る破滅の産声。バッファローの全力突進宜しく真っ直ぐに向かう呪わしき災厄。

そう——彼女には、？常識？が無い。サヴァンの代償として彼女が失った物——それは、人間として最も欠如してはならない物だった。

言っちゃえば、人間としての螺子が外れてる。

「ちよつとまこちゃん！」

「……………たはー……篠崎さんでしたっけ？」

「何で他人行儀？ っていうかそれどころじゃないんだってば！」

「あ、いえ……僕はこれから職員室に」

「なんてこった、まこちゃんも！」

「あの……篠崎さんですよ？ 僕は……」

「どうしよう！ 職員室だよ、職員室！」

他人のフリ作戦失敗。策士を目指すのはやめよう。

成程、浅間の『常々人間に耳は必要ないと思っていた』という台詞を聞いて、ああそうかもなと思っていたが、こりゃ主義を改める必要があるそうだ。

そうこうしている間に周りからは猜疑が眩かれ始めた。

「……ね、あれって三年の篠崎って人じゃない？」

「あ、あの変人で有名な……でも何で虚偽君のところに？」

「何、まさか恋人同士？」

畜生め。

「……面ッ倒くせえ」

人の口に戸を立てる事ほど難しい事は無いと、黒歴史を暴露されてきた先駆者達はそう語っている。かと思えば『人の噂も七十五日』とか言うし、ややこしい世の中になったもんだ。

「ちよっと聞いてんのまちゃん！ 兎も角一緒に職員室行こうよ！」

世の中を危惧する暇も無い災禍がここにあった。

「……ややこしえすと」

「何それ」

「estは最上級だって習わなかったのかよ！ この状況のややこしさが分かってんのか！」

ざわつきを増す周囲。やがて浅間まで椅子を少し引いて、躊躇いがちに話しかける。

「……なあ、虚偽……お前ら」

「僕達親友だよな！ な！ な！ なあ！」

「……いや……ああ………うん？ ……ああ………  
…うん………」

切り抜ける術が無い。前門の虎、後門の龍、上空のコンドル、地上のアナコンダ。

「ほら、職員室！」

「……後で行くから、ちよっと待って」

「今行くの！ ほら！」

「あの」

群集の中から声があがる。女子に歯止めを掛けるのは不可能だと崩壊していく平穏がそう告げている。男子共の冷たい視線がロングヌスと重なって見えた。

「もしかして虚偽君の彼女さんですか？」

「いえ、姉です」

破滅だった。

「……お……」

「……」

苗字違うだろ？　とか、多分、こいつらはそんな事を考えてるんだろう。

「……おねえ……ちゃん？」

「おい虚偽……お前……何だって……？」

「彼女はちよつとエロゲのやり過ぎでね」

「思い出いっぱい夢おっぱいとか言ってたのはまこちゃんでしょうーが！」

「ハハハ何を言ってるんだこの人は全く……どこかの病院から脱走して来たに違いない」

ブチン、と頭皮に嫌な感覚を確認した時には僕の草原から大事な雑草が二、三本程抜かれていた。

「いってええええ！」

「いいから来るのお！」

常識的に考えて常識が通じる訳も無い。何せ常識が無いんだから。分かった、行く、行くから離せ！」

「とゆーわけで一年二組十二番虚偽真、暫しお借りしまーす」

「……虚偽、お前……」

「哀れむな！」

「……堕ちたな」

嘲笑だった。



「来たな虚偽、あとお前もだ、篠崎」

「来ましたよ先生」

「仕方なく」

「頼むから僕の平和を壊さないでください」

「だって面倒臭いじゃん」

来る最中もずっと悪態を吐いていたあたり、相当来たくなかったと見える。呼ばれた用件は大よそ見当が付いている。呼ばれた面子が面子なのだから。

「……さて、もう分かってるよな、何で呼ばれたか」

「問おう、貴方が私のマスターか」

「聖杯戦争じゃねえよボケ。授業態度の話だ」

「だって虚偽君」

「だそうですよ篠崎先輩」

「お前ら人の話聞け」

戯ける馬鹿二人を睨む松井先生。一介の教師如きのスローガンに耳を傾けていたら僕らの耳は地盤に沈む。

「……いいか、問題児共」

あーちゃんの顔が不快感を表したのも気にせず、松井先生は話を続ける。勿論不愉快なのは僕も同じだが。

「お前らが勉強出来るのは当然だ、出来て当たり前なんだ。だからお前らが勉強をしないのは勝手だ。けども、他の奴らは勉強しに来てるんだよ。頼むから授業を聞くフリぐらいはしてくれ、周りの士気を下げるな」

「うーす」

「あいあい」

「聞いてねえだろお前ら」

言って、松井先生は書類に目を通し始める。

「ったく——俺は羨ましいがね、お前らみたいな才能が」

「言うのは簡単ですよ。これ、一步間違えれば才能じゃなくて只の欠点ですよ」

「だろうな。ま、凡人と天才の違いってこった。凡人は天才に憧れるが——その逆は珍しい。その珍しい方に当たるお前らだからこそ、その才能を使いこなせてるんだろうがな。もう戻っていいぞ」

「帰ろっか」

「そだね」

言って、ドアを開けた瞬間に松井先生が呼び止めた。まるで何か、天変地異でも恐れるみたいな表情で。

「早く帰れよ、ここんどこ物騒な事件多いからな」

「事件？」

聞き返したけど、返事は無かった。

「あとお前ら、噂になってるぞ。天才カップル、ってよ」

そんな戯言、世界の真理。

「とつくの昔に知ってるよ」



「……で？」

「バッチリ怒られた」

「……俺は自分でも学年最悪の馬鹿だと自負してるが、人格的に前ほど馬鹿な奴はいないと確信してる」

さらっと人の尊厳を地面へめり込ませておきながら、浅間は休み明けの連絡を携帯で写真に取っていた。

「おいおい浅間、お前が学年最悪クラスの馬鹿なのは生活態度が酷すぎるからだろ。いくら勉強する気が起きないからって、学習記録表に勉強時間ゼロって書くのはどうなんだ」

「勉強してねーのに十一時間って書いたお前よりましだ」

「世界はそれを策略と言い、僕たる器を奇才と言う！」

「言わねえよ。只のハッターだろうが」

連れない野郎だった。放課後のオレンジがやけに鬱陶しく見える今日この頃に、黒板の緑ほど美しくない色彩は無いと思った。

「……で、だ。お前に聞きたい事があるんだが」

写真を撮り終えて銀色の携帯を鞆へと仕舞う。既に人が出払って日直が仕事を全て終えた後の教室。浅間は日直の仕事をまるで無に返す様に窓を開けて、風に打たれる窓側のその席に座り込んだ。

「篠崎群青って、何モンだよ」

「デジモンかな？」

「しばくぞ」

「じゃあポケモン」

「あのな……」

「そんなに悶々しない」

「揚げ足取るんじゃないよ、姉ってのは本当か？」

僕は嘘を見破られる事を何より嫌う。

風が吹いた。

酷く生暖かい、腐りきった怠惰を促す様に醜惡な風が。

「本当だよ」

「詐欺師にしちゃ珍しく騙らねえな」

「真実を騙る事と虚偽を語る事は別物さ」

妙に長くなりそうだったので隣の席に腰掛ける。夕日が削り取られていく遅さを眺めながら、自動応答装置となった頭で浅間の問いに対する答えを用意した。

「……姉ねえ。何で苗字が違うんだ？」

「知った事かよそんなの。向こうが勝手に僕の姉みたいな真似をしてるだけさ。あと家がお隣ってだけ。だから、正しくは姉じゃない」

後者は兎も角、前者は——ねえ。

「近所のお姉さん、ってか。流石は妄想都市だ」

「結局の所お前は僕に何が言いたいんだよ」

鞆から取り出される栗饅頭。

「……まあ、今のは俺の個人的興味で聞いたんだが」

一年間の糖分摂取量でこいつに勝てる奴は居ないと思う。いつ見ても何か甘い物を食べている。糖尿病で死にそうな奴ランキング、ぶつちぎりの一位だろうな。僕の携帯のこいつの登録名は『生活習慣病患者』だ。

浅間は二十秒ほど沈黙してから、鞆からニット帽を取り出した。

「話は百八十度変わるが、お前、最近誰かに尾行されてるって事は無いかな？」

「ある訳無いだろ、重要参考人じゃあるまいし」

「そうか。なら別に良いんだけどな」

振っておいて話の腰を折る時は大抵秘められた裏がある。本質を見抜くのにサヴァンかどうかは関係ない。

「で？」

「エニグマって知ってるか？」

「はあ？」

脳内図書館第三書庫三十六列目、四年前の八月二十日午前二時八分、ドイツ語辞典により発見。ENIGMA<sup>エニグマ</sup>——謎、謎めいた人物、事象、暗号機の俗称。

——便利な頭だよ、全く。

「お前、ニュースとか見ない主義だろ」

「深夜アニメならよく見るけど」

「お前は俺か……じゃなかった。まあ兎も角だ、ニュースで最近そういう奴が話題になってるのさ」

ニット帽が指の先でくるくると回る。

「被害者総数十四名、しかも犠牲者は進学校でトップ五位に入る賢いお坊ちゃまばかりだよ」

聞いた事が無いと思ったら、情報源が無い物を頭に納められる筈が無かった。

「連続猟奇殺人、て奴だよ。全く、レザーフェイスだかジェイソン

だか知らねーがナイフで腸引きずり出すだの眼球抉り出すだの、本当勘弁して欲しいね」

ヒヒヒ、と歪んだ思考を歪んだ口から出た歪んだ笑いに乗せて、浅間はニット帽を被った。深く、目も見えない様に。

「……で？」

「的になるんじゃないのか、そういう、天才カップル、ってのは」  
「お互いの首筋を舐めながら抱き合う関係？」

「アトリエかぐやの新作か？」

断っておくが僕はそんな不健全な物に手を出した事はない。

ごめん嘘、今の無し。棚一つ全部埋まってる。ていうのも嘘。本当は机の引き出しに三本ばかりあるだけ。

「お前の親が触れ回ってるらしいぜ、息子が天才だってよ。あと、お隣もな。そのお隣とやら——篠崎群青だろ？」

笑い飛ばそうと思っていた僕の魂胆は物の見事に笑い飛ばされた。笑い事じゃなかったからだ。言わずもがな。

冗談。触れ回ってる？ サヴァンを？ 担当医に隠せて言われたのに？ クソが、触れ回ってるなんぞ、気が触れてるとしか思えない。

「ジョークか？」

「なら良かったけどな。まあ、万が一、って話さ。二人の超天才児——天才を狙う殺人鬼にしちゃ最高の的だろうよ。もしかしたらだけども——」

怪気炎を放つその慧眼に伏すしか術は無かった。

「——お前ら、危ないんじゃないのか」

「…………マジで？」

「マジだよ。知り合いが死ぬのは気分悪いしな。ま、夜道に気を付けろってこった」

笑えない。フィクションならまだしも、一番現実を直視している人間から発せられるのだから尚更の事だ。成績的な意味で。

「お前が言ったんだぜ、妄想都市——メガロポリス、って。珍しく

も何ともねーんだろ？ このぐらい」

「……」

「俺は馬鹿だから関係ないけどよ、お前ら気を付けろよ。校内選りすぐりの天才児二人が殺人鬼に殺される、なんて馬鹿な話、洒落にさえなってるねーからな」

「……用事ってそれ？」

「生徒会から伝言で『アンケート結果を明後日までに提出しろ』だとよ。んじゃな」

言いたい事だけ言って、ニット帽のクソ野郎は窓も閉めずに教室から出て行った。其処彼処に爆弾<sup>フラグ</sup>を張り巡らせて。

「……………エニグマね」

成程、随分と楽しくなってる来やがった。記憶するだけだった日々から趣旨替えだ。

ごめん嘘、今の無し。

冗談じゃない。僕もあーちゃんも、望んでサヴァンになった訳じゃない。只、確率を飛び越えてそういう風に生まれてしまったただけだ。不平等な障害で不当な死に方して溜まるかつーの。

「――」

ふと刹那に。

怖気を感じて振り向くとニット帽がいた。

「――歪<sup>いびつ</sup>だねえ」

「……まだいたのかよ」

ヒヒヒ、と先刻と同じ歪んだ笑いが聞こえた。

「――思わねえか、サヴァン。天才として生まれ、才能に追撃され、周囲に攻め立てられ、四面楚歌で背水の陣を敷かざるを得なくなる。凡人として生まれる事も出来ずに天才として生まれ天才として生き天才として死ぬんだぜ。生まれは愚か死に場所さえ選べずに、いや、死に方さえもだ、そうしてそいつらは死んでいったんだ。もしかしたら只の努力家だっただけかもしれない。平凡で、只単純に上を向いていただけの奴かもしれない。天才と秀才の差異っての

は何だと思う」

いきなり何を言い出すのかと思えば何やら語りだす。

常軌に有るまじきその形相に、脳髓が隙間を縮めた気がした。

「才能だよ。才能の有無だ。是が非であろうと是を非にしようと、そいつだけはどうにもならない。九十九%の努力で天才に肉薄出来ても、1%の才能でその間隙は零になるのさ」

扉に重心を傾けながら、ただ鬱屈した笑いを唱える。

「何がだよ？ お前、何言ってるんだ？」

「俺はなサヴァン、お前らみたいな天才って奴が大嫌いだよ。他に努力してる奴は幾らでもいるのに、そういう奴らはぶっちぎりで評価されていきやがる」

「……天才って言葉を使うのは敗者だけだ。勝者はそれを天才と叫ばない事を知ってる」

「なら俺はどう呼べばいい？ 天才を天才と呼ばずにどう呼ぶんだ？ 俺は知ってるぜ、？ 只生まれた時からそうだった？ ——そんな理由で優遇された奴をな。大した努力もしてないのによ。世の中は敗者だらけなんだよ。でなきゃ天才って言葉は生まれて来ない。分かるかサヴァン、俗に呼ばれてる天才って奴はな——例外なく死んだ方が良いのさ。努力もせずに成り上がった死骸が、何で他人の屍を貪ってやがるんだ」

「そいつは勘違いだ。努力して成り上がった奴を——」

「そういう奴らは例外なく努力をしてる訳じゃねえんだ。二種類いるんだよ。本当に才能だけで成り上がった奴と、努力して成り上がった奴と。前者なんざ災厄の範例だぜ？ 反面教師もいいところだ」

「俺は嫌いだよ」

何だ。

「才能を持ってる奴が、大嫌いだ」

こいつは——誰なんだ。

「お前……」

「その先は必要無い。いいかサヴァン、忘れるんじゃないぞ。俺達みたいなクズはな、一人残らず死んだ方が良いのさ」

「……………達？」

ヒヒヒ、と歪んだ笑いを残して、今度こそ本当に浅間は去っていった。

執拗に廊下から響く奇怪な怪奇音を残して。

「……………」

エニグマだ、と嘲笑う。

思考が現実を凌駕出来る道理は無い。どう頑張っても併走が限界だ。

「しかし、ねえ……………」

何が可笑しいのか知らないが、哄笑する浅間は実に鬼気迫る姿だった。

そう、あれはまるで――。

いや、やめておこう。

気狂いが気狂いを笑う道理なんて、それこそ無いのだから。



「さあぼったなああああああああああ！」

なんて彼女の怒号が聞こえてきたら最後、僕の首筋に鼓動は無い。見つかったら終わりだというこのスリルの帰り道、背徳に背筋を苛まれながら深淵を歩く。配置された蛍光灯は人一人いない暗夜行路を照らし出し、無意味のオブジェに成り下がっていた。背後にいる人外は人の範疇には含まないでおこう。

土日を挟んだ後の月曜日、時間割はまさかの学力調査。腐ってる



にも程がある。熟成しすぎた現実世界は空想にさえ劣るってのに。

「世も末だ」

かつん。世紀末をとくに迎え終わった人間の言う台詞では到底無い。

メガロポリス  
妄想都市。全てが容易に起こり得る世界。超能力者だの怪物だの、殺人鬼だのと。

浅間から得た矮小な情報を整理する限り、『成績上位者を狙う猟奇殺人鬼』という事だろう。はつきり言って秀才嫌いだという事意外は何も分らない。

秀才嫌い、ね。

結局、浅間は何が言いたかったのだろう。学力コンプレックス、という奴だろうか。劣等感とかは、人を鬼にする要因って言うし。

「……何を大真面目に考えてるんだ」

かつん。

「……あー……」

かつん。思い返せば無価値な過去だ。そりゃ死にたくもなる。学校に行けば辞書を読み、家に帰れば本を読み、記憶、記憶、記憶。記して憶えるだけの日々。煩わしさに塗れた愚直なまでに愚かな人生。いや、もはや自分が人で在る事さえ忘れていたに違いない。

そんな僕の世界の色彩がぶっ壊れ始めたのは、篠崎群青と喋る様になってからだ。

出会って始めの三年は全く喋らなかったにも関わらず、中学に入った辺りには既に親友以上になっていた。思い返すもおぞましい闇色の暗黒、陳腐な絆だ。

所謂世俗的な物に接する事が無かった僕にとって、篠崎群青の存在は女神その物だった。美人や美女という概念を知らなかった僕が最初に見た美人という奴——恐らくはそれが篠崎群青だったのだ。

忘れる事の無い他の記憶と比べても忘れる物か。他の記憶なんかどうでもいい。あれは三月十四日の話、記憶に飽きた僕が何をするでもなく公園の丘に出かけた時の話。盛大に転んで膝を擦りむいた

右足へと舌を這わせた――

「……ストップ」

かつん。思い出したくも無い、公衆の面前で一つ年上の女に膝を舐められたなんてクソ恥ずかしい記憶。

「……………」

かつん。それから僕の世界は蒼海色に染まっていった。下らないまでに白黒だったブラウン管テレビは急激に色を帯び始め、時間の価値を知り始める。

かちやり。篠崎群青。群青。青。青。青。空の様な。海の様な。

気付けば頭の中は群青一色だった。

「どうでもいいな、うん」

かちやり。マゾでもないのに自嘲してみせる。いや、篠崎群青に對して、という限定的な意味合いを含めれば僕はドマゾの部類に入るだろう。同時にドサドの意味も含むだろうが。

結局最後には思い知らされるのだ。

凄絶に残酷な惨劇であろうと、完璧に忠実な完全であろうと、不敵に美麗な絵画であろうと、旋律に戦慄く程の音楽であろうと――それらの全てを以ってしても、僕の中の篠崎群青と比べればゴミ以下だ。

浮かぶ情景はあの頃の憂愁、求めるのは不完全で歪な愛、言葉で飾り付ける事さえ無粋に当たる淫靡かつ蠱惑な美貌、雑音的な旋律ノイズを跳ね除ける一言。今までに聞いたどの音楽よりも、彼女の声の方が美しい。

世界一つと僕の全てなんて天秤に掛けるまでもない。この汚濁した世界が今滅び去ろうとも彼女の笑顔は全てに勝る。

「一人ファンクラブだな」

かちやり。創始者にして唯一。僕以外に彼女のファンなど必要無い。

「……………」

かちやり――さて。

そろそろ遊びはお終い。

先刻から鳴り響くフォールディングナイフの開閉音が鬱陶しい。足音でさえも鬱陶しいのに金属音なんか出されたら溜まったモンじゃない。

ふと立ち止まる。どうやら電柱の尾行者は気付いたみたいだった。或いは僕が、気付いたのか。

「尾行、下手だな。僕があーちゃんの後を尾けてる時の方がマシだぜ」

言っというてなんだが、どっちがストーカーだか分からない台詞だ。三十秒ほど待っても尾行者は出てこない。

「出て来いよ、謎の卵<sup>エニグマ</sup>」

出てこない。只沈黙する。声色を出すのを躊躇っているのか、動揺しているのか、ハッターだと思っているのか、或いはバレてないと思っているのか。何れにせよこれだけシラを切り通せるのは余程神経の図太い奴だ。

「……どうなんだよ。もう帰るぜ、僕」

「——やあ」

「お？」

声は女のそれだった。やけに凜として透き通り落ち着き払った声。「アンタ、虚偽真？」

何かを訴えるように投げ捨てられた一本のナイフ。耳を蝕む不快な音の正体は、金属音を立てて地味に転がされ、等速直線運動を続けた後、静かに路傍へ留まった。

「そうだよ。虚偽か真かはお前が判断してくれ。で、僕に何の用だ？」

オブジェの称号から無が消えた。

爆ぜた蛍光灯が照らし出したその姿は灰色のパーカー。そして先刻転がったナイフには飾り付けられた紅い絵の具。

「なあ、アンタ、オレと殺し合わないか」

願いとも取れるその悲痛な訴え。妄想都市の中でさえ聞かない様

な殺し文句。一瞬で異常だと判断出来た。

「止めとくよ。リアルでオレっ娘を見たのは初めてだからね」

貴重ですな。是非とも人間国宝に指定したい——いや、冗談はやめよう。凍るのが空気だけじゃ済まなくなる。只でさえギャグセンスは乏しいのに。

僅かに光る眼光。

青いジーパン、灰色のパーカー、ボンキュッボン——じゃない。

兎も角スタイルはいい。残念ながら顔までは見えない。眼球だけが妙な鬼火色を放っている。発せられる独特の雰囲気は、所謂人外魔境の領域なのだろう、放課後の浅間と似たような物を感じさせた。僅かに覗く栗色のツインテールが、妙な可愛らしさを与えていた。

「……ああ、実に恐ろしきは何とやら」  
まずい。

冷静に考えたら相手は殺人鬼だった。悠長に歓談している場合でもない。張り巡らされた幾重もの死亡フラグのゲリトラップ、どう回避する。

「で、何で僕を殺したいんだよ。話ぐらいは聞いてやるぜ、学歴コンプレックス野郎。そんなに賢い奴が気に入らないのか？」

パーカー野郎は口元に人差し指を当て、何やら考える。

「……んー、正解っちゃ正解。外れっちゃ外れかな」  
もう訳が分からない。

最近の殺人鬼の社交辞令ではこれが当然なのだろうか。ハンニバルみたいに関交的なら良かったのに。ごめん嘘、今の無し。食人は勘弁。

「アンタさ、自分の存在について考えた事はあるか」

「無いよ。僕は自分の存在なんかどうでもいい」

死せども。

「彼女がいればそれでいい」

「……気狂いだな」

そんな戯言、世界の真理。

「とっくの昔に知ってるよ」

まあ、別に死んでも困りはしないんだが——ごめん嘘、今の無し。  
まだ生徒会のアンケート提出してないし。

「……ま、いいや。あばよ鏡像」

「実像だよ」

何がしたかったのか分からぬまま、殺人鬼はナイフを拾いもせず  
に、闇の奥へと消えていった。

「……………ああああ焦ったあ……………」

何処に入っていたかも知らなかった力が、一挙に全身から抜け  
ていく。虚脱感が凄まじい。緊張から解き放たれた神経が疼く。浅  
間の話によれば、僕は今死ぬ筈だったのだ。間一髪。危機一髪。

「——いや」

自惚れだ。

記憶の積み重ねを天才とは呼ばない。天才の定義は学力以前にま  
ず人である事が大前提だ。機械に人間の定義を適用するってのは、  
ねえ。

「……」

投げ捨てられたナイフが赤いつてのは、誰かが殺されたって事か。

「こりゃ明日の朝刊は決まりだな」

ここまで来て漸く錆び付いた肉体は吐き気を催した。

何て請った、我が十六年の人生。

サヴァンである前に僕は人でさえ無い。

殺人鬼と歓談に耽っていたというその殺人的な事実でさえも、記  
憶の隅から消えていたのだから。

——刃に絡みついた紅は酷く厳かだ。

嗚呼、不謹慎な礼讃が頭を巡る。

消えた命の残り湯つてのは、こんなにも美しい色をしてんのか。

くはっ、人間って怖いねえ。

ごめん嘘、今の無し。

人間なんてそんなモンだろ？

■  
1.  
E  
N  
D

01

BLUEBELL

JUNKIE

(後書き)

## 02 サヴァンと√なアイツの名前（前書き）

「まこちゃん。私ね、白が好き」

「……白？」

「白は、綺麗でしょ」

「……うん」

白いまま。

違うんだよ、あーちゃん。

「僕は蒼がいい」

「蒼？」

「群青色が、特に」

「……ませてんなー、おい」

白は綺麗だ。

でもあーちゃん——君は知らない。

白は。

白は——



## 02 サヴァンと√なアイツの名前

最初に前述しておくが、この話は夢オチだ。

目覚めると、やはり僕は闇にいる。

——僕の部屋に陽の光は差さない。

閉めた雨戸の隙間から僅かに漏れる明かり。日中はそれだけが頼りだ。まず僕はこの空間に長く居る事が無い。

「……」

時刻は七時三十分。登校には少しばかり早いが——他にすることも無い。第一、僕にとってこの家は飽く迄只の宿でしかない。

——僕の部屋に陽の光は差さない。

机の上に置かれた一枚のメモ切れ。おおよそ食事とは呼べない様な、インスタントの山。

「……ここは」

誰か教えてくれ。

ここは、故郷か。

それとも。

——僕の部屋に陽の光は差さない。

お湯に入れて、レトルトカレーを温める。効率主義者にはよくある事だ。まして自分の息子を殆ど機械同然に思っている親となれば。間違っでは居ない。第一、僕自身としても僕が機械である事を認めている。

——僕の部屋に陽の光は差さない。

幼い頃から一度も、僕は家の中で日の目を浴びた事はない。この家には人間が住んでいない。機械と猿が共存しているだけだ。そういう意味じゃ、僕は浅間が凄く羨ましい。あいつの家庭には、少なくとも日の目が満ちている。

——僕の部屋に陽の光は差さない。

レトルトのカレーを頬張る。別段旨くない。不味くも無い。百二十円の味と言ってしまえばそれまでだ。そこにそれ以上の価値は無い。レトルトという付加価値が無ければ、このカレーにはもはや存在証明が無い。

或いは僕も、彼女も同じか。

——僕の部屋に陽の光は差さない。

否、それは驕りという物だ。僕と彼女を同じ土俵で比べる事は許されない。まず価値云々の話ではないのだ。

いつだったか、彼女と学校帰りに食べたレトルト食品は、あんなにも美味しかったのに。

——僕の部屋に陽の光は差さない。

スプーンを握る手が止まる。そのまま固まって、カレーは冷めた。酷く、寒く、冷たく。

食べられない。食べない。食べる意味が分からない。

——僕の部屋に陽の光は差さない。

お茶を流し込んで、暗い部屋から玄関へと向かう。

そうとも、僕にとって、言わば彼女だけが全てだ。それ以外の全ては無価値に等しい。彼女の居ない空間など、僕にとってはもはや虚無以外の何物でもない。

そう——だから。

——僕の部屋に、陽の光は差さない。



「おはよう、まこちゃん」

「おはよう、あーちゃん」

相変わらず髪は綺麗だった。いや、髪だけじゃないけども。その場にいるだけで空気が浄化されていく様な神々しさ。

「おや」

「？」

何やら僕の顔を覗き込む彼女。かと思うと、いきなり笑い出した。

「朝ごはん、カレーでしょ」

「……付いてる？」

「付いてる」

思いつきり擦るが、取れたかどうかは分からない。ああ、鏡がなければ自分の全てが確認出来ないって事は、感情も多分そうなんだろうなあ、と一人で悪い癖を働かせる。自分の事なんか自分に聞く方がどうかしてるのだ。

「まづかったよ」

「え？」

「レトルトの奴。途中で残してきた」

「そっか」

何も言わない。何も言えない。彼女が僕に愁いを見つけても、僕が彼女に傷を見つけても、僕らはもはや何も言わない。何故だかは知らない。僕らにも分からないのだ。自分の事なんか自分に聞く方が間違ってる。興味の欠如、とはちょっと違うけど、多分これも、サヴァンの影響なんだろうな——なんて。

「いつかさ」

「……？」

「カレー作ってあげるよ」

「……そりゃどうも」

そう言って彼女は微笑む。

全く、世の中不公平ってのはよく言ったモンだな浅間。そうだろう考えたって——機械と宝石は釣り合わない。

「そう言えば、あーちゃんってどこの大学行くの？」

「んー……何処でもいいんだけどなあー……」

「だろうね」

正しくは何処でもいい、ではなく、何処でも入れる、だ。まして脳科学系統の学部なら、サヴァンの脳髓を喜んで欲しがらうだろう。最も、彼女はそんな扱いは望まないだろうけど。

——陽の光が嫌に眩しい。まだ桜の花がなっていない街路樹。枯れ果てた木々、それを照らし出す群青色の空と陽光。ハ、なんてミスマッチ。コンクリートの道路は舗装されずにガタガタのままだ。

「異能生物学かな。うーん、まあ、ちょっと興味あるかなー、ぐらいで……」

「なれるでしょ、あーちゃんなら」

「まこちゃんも来るんだよ」

「僕はもつと手抜きして生きたい」

我ながら駄目人間、正にクズ。

「冗談だけどね」

「よろしい」

このまま人生を進めば、僕は彼女と、世界で一番ハッピーエンドになれる気がする。



若干の肌寒さを我慢して階段を上る。擦れ違う生徒達は僕をまるで変態でも見るかの様な目つきで見ってくるが、そんな事はおかまいなし。今更だ。

教室へ着くと、教卓で浅間が何やら女生徒と話し込んでいた。

「……お？」

「あ、虚偽先輩だ」

「……うっげえ」

最悪のコンビネーションだった。

「虚偽先輩、おはようございます」

「……うん」

一番出会いたくない人種。つまりは厄介者。茶髪のボブカットで背の小さい女の子が、浅間と一緒に居た。背負ったギターケースは身長に似合わず少し大きかった。ベースだ、と怒られたが、僕からすれば弦の数ぐらいしか違いが分らないので、どっちでもいい。

暦美代子<sup>（こよみみよこ）</sup>。浅間と同じ軽音楽部のメンバーだ。おまけながらに後付しておくと、この学校は中高一貫校である。よって彼女は一つ下、中学三年生に当たる。

こいつはもはや、篠崎群青に次ぐ問題児だと言っている。

最初に出会ったのは一年前、学園祭のバンド演奏を見た時だ。終わってから、無理矢理打ち上げに付き添わされた。

「なんだ浅間、デートのお約束か」

「まあそんな所だが——お前も来ないか？」

暦がはしゃぎ出す。こいつがはしゃいだ時は、まあ大概は天変地異が起こる前触れだ。ナマズが地震を予知するのと同じ感じで。

浅間はポケットに手をつ突っ込むと、何やら紙切れをチラつかせた。

「遊園地の無料パスがゲット出来たんでな、丁度四枚ある」

「……四枚い？」

「虚偽先輩、篠崎先輩と仲良いんですね？ ダブルデートしませんか？」

「断る」

即答だった。オーケー、まだ僕の脳髓は衰えていない。

「何ですかあ！」

「調理実習で黒色沈殿を起こした奴と一緒に遊園地だって？ アマゾン川に全裸で浸かる様なモンだ。僕は行かない」

「まあそう言うなって、な」

「……な、じゃねえ。第一、あーちゃんとお前らに接点が無いだろ」  
勝ち誇った様な笑みで暦が笑う。シニカルに笑ったつもりだろう  
か、畜生、何て腹の立つ顔してやがる。まるで浅間だ。

「去年の有志バンドの時にお世話になったんです。だから大丈夫で  
すよ」

そう言えばそんな気もする。生徒会は学園祭の出し物全般を取り  
締まるので、ステージ発表の打ち合わせなどにも参加義務があった。

「……………本気で言ってるの？」

「本気だぜ。ほら、四月馬鹿って言うだろ、息抜きしようぜ」

「お前は年中馬鹿だろ。息抜きする前に成績表の赤点を何とかしろ  
よ」

「大丈夫ですよ浅間先輩、私、去年の成績、五段階中の二段階評価  
でしたから」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……あれ？」

「……マジで？」

「はい。二と一だけでした」

どうしようもないとはこの事か。篠崎群青といいこの子といい、  
どこか抜けている。どこかじゃない、天然とでも言うのか。兎に角  
危機感がまるで足りない。

「良かったな浅間」

「朽ちろ」

「お前は十段階中の五段階評価だったじゃないか、まだ望みがあるぞ。あと暦、こうはなるな」

「……ええい、俺の成績なんざどうでもいいんだ、結局来るのか来ないのかどっちだ!」

ふむ。と言われても、だぞ。

あーちゃんに確認を取らない事には何とも言えない。そもそも彼女はそのような大人数のイベントが嫌いだし、恐らくは来ないだろう。しかし僕の推論で意向を決める事も出来ない。ふむ、人生ってなんて面倒臭い。

「ま、あーちゃんに聞いてみるよ」

結局、無難にその場を沈めるのだった。



案の定、僕はそれを忘れて、帰って寝た。



で。

ぐるぐると回る観覧車。

二十四個配置された監獄の一つ、浅間と僕はボーッと外を眺めていた。

「……何でこうなるんだよ」

「僕に聞くなよ。ていうか僕の台詞だよ」

「何が悲しくて男二人で観覧車に乗らなきゃいけないんだ」

「あーちゃんと二人で乗るか？ 気まずさに耐えられないだろ？

僕だって暦と乗るのは気まずいよ」

「……おかしい……なんっかおかしい」

只管に回る観覧車。無骨な骨格には装飾の欠片も無い。

向かい側に見える少女二人。こっちに向かって手を振るその様は酷く無邪気で、そして傍ら邪気に満ち溢れている馬鹿二人がいたのだった。



そもそもの話は四時間程前に遡る。

丁度土曜日という事もあって、僕は家でゴロゴロしていた。

突如鳴り響くチャイム。思えばこれが破滅への兆しだったのだろう——いや、もっと早く気付くべきだった。居留守を決め込んでいればこんな事にはならなかった。

「はいはいどちらさぐっふう！」

ドアを開けた矢先飛び込んだきた篠崎群青。比喻ではなく、文字通り僕の胴体へと見事な鋭さと威力を兼ね備えたタツクルが直撃。その白いワンピースは短いんだから目の保養——じゃない、目のやり場にも気を使え。

「まこちゃん！」

「ぐ……ええい何だ騒々しい！ ていうか降りろ！」

「遊園地に行くぞ！」



「知らん！ 勝手に行け！」

ぐるぐると回る視界の隅、忌むべき灰色のニット帽がいた。ジャラジャラとアクセサリーなんぞ付けやがって、磁石かてめーは。

「そうも行かねえんだよ、眼球野郎」

「……どうしててめえが居やがりますですかこの野郎」

くい、と親指を立てて下へ向ける。俗に言う消え失せろのサインかと思えば、彼奴の腰ぐらいの高さ、見知らぬ顔が——すいません冗談です、サヴァンですから。

「おはようございます、虚偽先輩」

そこに居たのは、曆美代子。

「……ああ、思い出した」

マジかよ、こいつら本気だ。本気と書いてマジと読む。浅間と書いてバカと読む。

「諦めろ虚偽」

「諦めろまこちゃん」

「諦めろ虚偽先輩」

「」

厄日だ。

「分かったよ！ 行けば良いんだろ！ 行けば！ 支度してくるからちよっと待ってろ！」

階段を駆け上がった僕が続きを聞く事は無かった。

——そして僕は後悔するのだった。

このたった一度の気の迷いで、精巧な機械が犯した一度のミスで。僕は、人殺しになる。



鞆に詰め込むべき物は何だ？

財布、携帯、ぐらいたろうか？　そもそもこんな少量の荷物なら

鞆は必要ないんじゃないのか？

「……ま、いいか」

小振りな折りたたみ式の安物ナイフを一本、念の為鞆の奥底へと押し込む。まさか遊園地で検査されるという事も無いだろう。用途は勿論護身用、殺人鬼が昼夜問わず街中を跋扈するこの御時勢、身を守る術を持たずに闊歩してる奴の方が珍しい。

「物騒な世の中だよ全く」

ナイフを持ち歩く奴が語る台詞ではない事は重々承知しているつもりだが、それでもこの憂いに溢れた世界を嘆かずにはいられない。小学生でも氣力を失いかねない程に腐った怠惰の巣窟。最もそれは自分の立ち位置を基軸にした時の世界に限ってだろうけども。

こんな世界、地獄に等しい。

ああ、いや、違う。

地獄ではない。この目が見据える物がある。世界の基軸は自分ではない。



こうして現在に辿り着く。只、高校生がバイクの無免許運転は正直どうかと思われまますぜ、大馬鹿野郎さんよ。

「あー、平和だな」

ぼそっと呟く野郎の目線を辿れば、普段は醜惡の根幹となっている町が見えた。

醜くも美しい腐りきった卵だ。見難く美しいこの世界。歪曲した町の外形は、さながらモザイク。普段は複雑怪奇極まりない機械仕掛けの化物あたりに思えるのに、鳥瞰してみれば何て事の無い背景だった。重複する視界に融和するそれは、宛ら水中の砂糖菓子。

「どうした眼球野郎、珍しく低いじゃねえか」

「無価値だな」

「あ？」

戯けた頭だ。

「無価値だよ、ここは。なんとなく思っただけだ」

ゆつくりと上昇する視界の基準線。虚構染みたその様を眺める僕は酷く馬鹿な面だったに違いない。町はまるで市役所に展示されているジオラマの様に小さく、そして滑稽でありながら現実に従順だった。いや、現実だからそりゃそうだ。

「お前まで似た様な事を言いやがる」

「何がだよ」

「？無価値だよ？」

「お前も、って……僕は別に仲間探しをしてる訳じゃない」

その実どうだか。

「アイデンティティは個人で確立する物じゃないか」

融和した面影を凝視する浅間。嘗て無いほど驚嘆と猜疑に満ちたその顔を、僕は一生忘れない。これに限らず、だけでも。

浅間は頬杖を付いて、やはり和菓子袋を開け始める。右手を突き出すと、渋々と言った感じでこっちに投げて寄越した。

「……似たような事を言ってる野郎がいたんだよ」

「へえ、誰だよ」

「エニグマ」



外極まりない。

「よく観察したらあの野郎は女だった」

「……どこで分かったんだよ」

「胸だ。ありゃDだね、間違いない。俺の長年の経験がそう告げた」

「分かったもういい喋るな」

「まあ聞け変態」

「うるせー変態」

「奴のベルトにはフォールディングナイフがあった。折り畳み式の、安物だ」

へえ。

——そいつは、奇遇だなあ。

「帰り際に奴は言ったんだ」

「何て」

放たれた言葉は聞き覚えのある格言だった。

「自分の存在について考えた事はあるか、ってな」

ぼうっと思いついたその輪郭はやっぱり臃に霞んでいた。大体そんな質問に意味は無い。

「まあ、答えなかったが」

「だろうな。そりゃそうだろうよ。僕だって自分の存在について考えた事なんか一度たりともねえよ」

時計の針と観覧車の回転が併走する。

停滞は無い。

「こりゃ、死んだな」

ニット帽は表情を消し、そして僕の思考はテレビ画面宜しく一時停止した。風景は不変に動き続ける。殆ど頂点に達した箱庭、絶景に一瞥をくれてやる余裕は僕には無かった。

「なんで？」

「予感だよ」

「馬鹿かお前は」

「本能と生命が脈動してるとでも言えばご満悦か？」

歪に笑うその様は、やはりどこか。

「大体エニグマが狙うのは天才ばかりなんだろう。お前、馬鹿じゃないか」

「……弁駁しようが無いのが腹立つな」

「だろう」

茶々はこれまでだ。

形相と雰囲気から、この空気は戯言で崩せるほど脆弱な構造じゃない。

「分かってんだよ、自惚れだって。ああ、自惚れだが——野郎がそう言ったんだ、どうしようもねえ。全く腹の立つ野郎だよ。存在云々の言葉遊びが許されるのは中学生までだぜ。そんなモンで片付けられる程、人間ってのは簡単じゃねえ。世界の真ん中なんて一つしかねえんだ」

群青色の、女神像。

「俺は自分の人生をやり直そうとは思わないぜ」

「僕だって思わない」

「無価値なんじゃねえのかよ」

「あれはスパニッシュジョークだ」

そうとも。たとえ瓦礫の中だろうと。

「僕の樂園は彼女の傍以外に無い。桃源郷など有り得ない。理想郷も有り得ない。彼女がいればそれでいい」

「だろうよ」

軽蔑されると思った一言は以外にあっさり受容された。

「お前の価値はそれだよ。イコールなのさ、お前と彼女は」

「それだけは違うな」

「ん？」

「僕の価値が彼女だとしても、彼女の価値は僕じゃない。僕の世界と彼女一人、比べる事さえ痴がましい」

「——ハ」

ニット帽を被り直し、近付いてきた地上を見下ろした。

「存在だとか何とか小難しい言葉並べてやがるが、結局は皆そんなモンさ。自分の価値なんて大したモンじゃない。まったく馬鹿馬鹿しい、価値が無きゃ生きちゃいけないのかよ。そうさ、俺の価値なんて――」

扉が開き、係員の誘導に従って通路へと移動する。

真昼の陽光に照らされた浅間宗佑は、酷く爽快な笑顔で言った。

「――いや、やめておこう」

結局何が言いたいのかわからずじまいで観覧車は回転を止めた。分かっていたのかもしれない。

だからこそ、僕はこの一日の終わりに惨劇を見る事になる。



ここ、神宮市は、僕らの住んでいる所から街を三つ程越えた所にある。僕とあーちゃんとは電車で向かい、浅間はバイクで向かった。実桜テーマパーク、と言うらしい。海岸に接しており、レストランが海の家を兼ねていた。最も、今の時期では海水浴は滅多に無いらしいが。アトラクションは平凡と言えば平凡で、まあ、遊園地としては合格ランクだ。

僕らはそのレストランで昼食を終えて、ジェットコースターと急流滑り以外のアトラクションには殆ど乗り終えた。

「気持ち悪い……」

コーヒークップに乗り終えて、暦が一人で吐きそうになっていた。

「ううう、駄目なんだよ、駄目なんだって回転系は……」

「だろーうな、頭もあんまり回らないし。ま、酒と口は回るが」

浅間が苦笑いして、暦の背中をさする。僅かばかり手つきが変態

チックに見えるのは僕だけだろうか、いや僕だけではない（反語）。

「じゃああれだ、ジェットコースター乗ろうよ！」

「あ、それならなんとか……」

「良いけど、吐くなよ美代子」

「かれこれ四時間だぞ、よく飽きないなお前ら……」

つって、まあ、かくいう僕もなんだけどな。

えー、拝啓、背景へ。

本日は晴天なり。繰り返す、本日は晴天なり。

高らかに歓喜を謳いたい。そんな妙な衝動に駆られるほど、意味無き時間は意味無く過ぎた。モラトリウム染みたクソ野郎が傲慢にも世界を憂う。

上等だ。常套句で片つく心情なんぞ玩具以下。

惜しまれつつ、そして惜しみつつ。

奇しくも今日は、十三日目の金曜日だった。



ジェットコースターのコース上に佇む。

過ぎ去れば気付く筈だ。どれだけ世界に無関心な奴だろうと、憐憫の眼差しで眺めるパーカー野郎を見過ごしはしない。

迫る。

轟音と共に迫る青色の車体。二十四ある座席の真ん中、そいつら

二人は座っていた。

通過地点。

スローモーションかのような錯覚に囚われ交錯する視線。視界の隅に確かに捉えただろう。不敵に微笑む謎の卵を。

驚愕する二人の天才。

今のお前らにとっちゃ瞠目に値するだろ、なあ。



追って来い。ここまで来い。アイデンティティを天秤に掛けよう。  
刻み付けろよ、イディオ・サヴァン。アンタの陳腐な脳髓に。



「じゃ、買って来る」

僕の問いかけに対する答え、もとい要望は至って簡単な物だった。  
篠崎群青と暦美代子がポカリスウェットで、浅間宗佑がコーヒ  
ーのブラック。こんな簡単な文字の羅列は別にサヴァンじゃなくたっ  
て脳みそが入ってさえいれば憶えられる。暦はどうやら頭が入って  
いないらしかった。

——もつと明確に脳内に焼き付いた物があつた。

ジェットコースターでの滑走中、山の様なオブジェに差し掛かっ  
た辺りで見えたその人影。オブジェの一角に立つその影は視線を此  
方へと熱烈に注ぎ、そしてパーカーのフードを翻して笑いやがった。

あの目を僕はよく知っている。

安堵や歓喜ではない。単純な嗤いだ。卑屈なまでに自嘲掛かり鬱  
屈した靄を吐き出す様な歪な嗤い。

「全く、おにーちゃん、疲れちゃうぜ？」

辿り着いた山のオブジェ。長方形に切り取られた入り口には『展  
望台』と看板が立ててあつた。成程、確かに高くはある。明確な数  
字を連ねた所で想像の範疇外だ。少なくともジェットコースターと  
同等以上の目線には立てる。

「……やってらんねえ」

「だろうよ」

気付けば僕の右隣に浅間がいた。

「……自販機の間所を間違えたんだ」

「喧嘩を買うなら場所はここであってるぜ。先着二名様だ」

「端数は切り捨てだったんだけどな」

気分は英雄、現実には石像。

重い足を進めて螺旋状の道路を登っていく。視界の端々を流れて行く観光客は平和ボケの領域に足を踏み入れつつ双眼鏡に百円玉を入れていた。

「……阿呆臭え。景色一つ見るのに何で百円も払わなきゃいけないんだ」

「でも百円で脳内の壁紙フォルダが増えるんだから良いじゃないか」  
「便利だろうな。パンチラ見たらいつでも思い出せるんだろ」

「……お前がサヴァンでなくて本当に良かったと思うよ」

なんつー無意義。こいつ、異常聴力とか使って盗聴してるんじゃないだろうな。

眺めても眺めても景色は特に変わり映えしない。建築物の森林、アスファルトから発芽して行き渡るだけの心臓付き観葉植物。群集が一個体に見えてきやがった。頂上に近づくに連れて人が少なくなっていく。流石に頂上まで展望に行く人間は少ないのだろうか。然し眺望というのは頂上からしなければ意味が無い筈なのに。

「虚偽」

「何だよ」

頂上の扉を前にして浅間は呟いた。

「まあ無いだろうが、もし俺が死んだら」

「言ってる。その先は聞かん」

守れない約束はするモンじゃない。そう教えたのはお前だ浅間。  
アイデンティティ  
「存在証明はちゃんと持ってきたか？」

「家のゴミ箱に放ったらかしだよ」

「それでいい。開けるぜ」

浅間はドアノブから手を離し、回し蹴りで蹴破った。

何を？

鉄の扉を。

「——人の原初だ。それは人間が叡智を持つが故に生まれた究

極にして完全な兵器。いや——或いはそれが叡智を持たせたのかな——どっちでもいいのさ、そんな事」

開けた視界の中、映る虚空に佇むパーカー野郎。放たれた甘言は灰色のパーカーと青いジーンズを通り地面を這い、そして僕らの足へと辿り着く。隣で黒い革ジャンの色彩が歪に揺らいだ。

「どんな銃弾よりも速く、どんな刃よりも鋭い——そんな人類史上最強の凶器って何だと思う？ 教えて頂戴、サヴァンさん」

即時に答えを悟って隣で皮肉げに笑うニット帽。臓腑の底から湧き出る様なその笑い方には何処となく自嘲の意味合いが感じられた。ああ。分かっているさ、あれだろ。謎の卵は振り向かない。

「答えるまでも無い」

「だから聞いているのさ」  
腹の立つ野郎だ。

「言葉」

「正解」

振り向いたパーカー野郎。

艶を帯びて空気中を漂う声色が耳を貫く。

風に煽られて曝された素顔が世界の色彩を歪めた。

茶眼、茶髪、美貌。整った顔立ち、ツインテールが装飾する背景。

嗚呼——なんて、醜悪で、腐った、猥雑な、汚濁した——  
こんなモノ、眼の毒だ。



「ちゃんと来たんだ」

「うるせー触覚野郎。招待状の無いパーティーなんぞ誰も来やしね

え。俺も、虚偽も、たまたま此処に来ただけだ」

「パーティー程華美な装飾は無いけど——アンタら二人相手の装飾なんて、言葉で十分だろう」

「本題に入れ」

「これが本題さ」

攻撃的な浅間の言葉を受け流し、順列的に並んだ常套句を並べ替える。暮れかかる夕日を羽として纏い、整い切った憂愁のコントラストをパーカー野郎がぶち壊す。

「オレが初めてアンタらに出会ったのはついこの間さ」

男喋りが境界線を右へ左へ浮遊していた。

「天才って言葉はそもそも馬鹿が生み出した造語でね。俗説なんぞで語るつもりは毛頭無いけどね——それにしたって基準が曖昧な言葉は使うべきじゃない」

「定義を明確にするのに必要なのは定義が曖昧な言葉だろう。確立された叡智の共有なんて在り得ない。お前と僕じゃ天才の定義は違う」

「アンタの中に天才なんてモンは存在しないだろう、サヴァンは。」

この野郎は——分かっていて咀嚼してやがる。

「だから？」

「アンタらは二人ともそうさ。？天才なんてモノは抽象的な輪郭だ？と思ってるから、自分達の価値に気付けない。得てしてそういうモノなんだろう、天才って奴は。最も、殺した二十三人の中にそういう奴は二人しかいなかったけど」

至極どうでもいい。

気だるさと反比例して、エニグマは雄弁を振るう。面白くも無い、饒舌を。

「オレは殺す前に対象をトレースするのさ——何から何まで全部。でもアンタら二人だけは何度やっても齟齬が生じてトレース出来なかった。成り切れなかったんだ」

「勝手に話を進めるんじゃないやねえよ」

「なら追走したらどうだ、異常聴力」  
ベルナデイク

不愉快げに動くニット帽の眉毛。自分の諸刃を叩かれるってのは錆を被るのと同じだ。不愉快以外に形容の仕方が無い。

「お前の目的ってのは何なんだ？ 話に聞くエニグマってのは、天才を殺し回ってる猟奇殺人鬼なんだがな。警察とかに追われて大変なんじゃないの？ ぶっ殺す対象と歓談に耽ってる暇があるなら刑務所に持って行く鞆に希望でも詰めたらどうだ」

「目的、ね——事あれば起源、因果、関連、種子、祖を求めたがる——論理的思考に基づいた馬鹿のやり方だ」

ぼうっと眺めた景色の中、気付けば浅間の足が地を蹴っていた。交錯。胸倉を掴み上げる右腕が歪んで見えた。

「……昔の俺なら殴ってるぜ、触覚野郎」

「でも殴らなかった。理解したんだろう？ オレとアンタの違いをさ」

決定的な違い一つしかない。こいつは——人外だ。

「妙だな——エニグマ、てめえ、心臓はどこに置いて来やがった？」

「は？」

サヴァンでも耳を疑うレベルだった。

そうだ。その発言はそういう意味であって以上でも以下でもない。暗喩でもなければ擬人でもない。単純な直接的表現なのに。

「……浅」

「心音が、聞こえねえんだよ」

僕はどちらを疑えばいい。

浅間の台詞を聞いた自分の耳か。

野郎の心音を聞いた浅間の耳か。

人間のレベルで可能なのか。聴覚出来ない音声を捉えるなどと。

「エニグマの名は伊達じゃないって事サ」

右腕に手を置き、静かにその指を解き解す。清楚に微笑する茶髪のツインテールは余計な茨にしか見えなかった。

「成程——本当に異常聴力だね。でも困ったな、アンタが天才かどうか怪しくなってきたよ。只の異常じゃん、それ」

「知るかよ。死んだ方が良い事に変わりは無え」

自信満々に張り巡らせたその虚勢は、蜘蛛の糸ほど複雑ではなく、まして強固でもなかった。蟪蛄は糸を解き解し、浅間宗佑のテリトリーを蹂躪する。

「どうしてそんなに自分を嫌うのかな。別に良いけど。存在証明アイデンティティには影響無いし」

「世界の真ん中が俺じゃねえからだよ」

「……ふうん。ま、いいさ。虚偽真、今日は別にアンタに何をしようって訳じゃない」

「はあ？　じゃあ」

存在証明。自己としての確立。何がそこまでエニグマを駆り立てる。

影薄き謎の卵よ。

お前の双眸は——何処を見ている。

アイデンティティ、存在証明。

世界の中心。

世界構成、確立、成り切れなかった。

——  
まさか——

「悟ったろう？　イディオ・サヴァン。回りすぎる頭と先駆けすぎる勘の良さ、研がれすぎた思考の刃と結末を推量する知恵の積乱雲——だから見なくていい地獄を見る。つって、まあ、ちょっと悟るのが遅かったな」

ははあ成程。

「言った通りさ。アンタに何をしようって訳じゃない」

「ッ！」

踵を返して下へと走る。間に合うか？　いや、多分もう遅い。

「おい虚偽……」

「お前はそこでエニグマを見張ってる！」

疾駆、疾駆、疾駆、疾駆。半滑落状態で螺旋階段を滑り落ちていく。呼吸器官の暴発を恐れてる暇があるなら走れ。

何故気付かなかった。何故気が回せなかった。何故気付けなかった。何故気付こうとしなかった。油断だ。惰性と自惚れに他ならない。

二つの世界がベンチに居たのだ。



「さて、これでオレとアンタの二人きりだ。何して時間を潰す？ 騎乗位？ 正常位？ それとも開脚位？」

「茶化すな。狙ってこうしたんだろ？」

「それが分かっててサヴァンを止めなかったんだらう？」

忌々しく響く舌打ち。殺意を乗せて投擲されたその音声は、天才殺しに排斥されて空しく消えた。



陽動作戦か。

僕と浅間をエニグマという自らの釣り餌で引き離しておきながら、別の手駒を使って天才殺しの範疇に無関係な周囲の人間を巻き込む

というのか。卑劣だ、卑怯だ、腐ってやがる。

「どこだ……どこだどこだどこだ！」

落ち着けサヴァン、幾ら記憶しても活用しなきゃ何の意味も無い。ベンチだ。ベンチにいる。

いた。

ベンチに――

ベンチに――？

「――ッやられたっ！」

二重複線。

張り巡らされたエニグマの鉄線が、獲物を絡め取っていく。

どうだろう、僕が戻るまで浅間は生きてるだろうか。

さあ、分かんね。知らね。

別に浅間が生きてようが死んでようが――いや、この先は無しだ。



風に靡く茶髪のツインテール。誘惑紛いにゆったりと進むエニグマは、浅間の眼前へ迫り着く。

「ね、死を教えてあげよっか」

「ほざけ」

ニット帽の右腕が走る。残像さえ纏っていきそうな常軌にあるまじきその速度を、然しエニグマは避ける。

「な……」

「早漏だなあ」

速いと感じる暇さえ与えない。即座に抱擁する形で首に絡みつくエニグマの両手。



首元に突き刺さった注射器と共に盤上が詰んだ。

「焦らなくてもいいんだよ——」

耳元に届く卵の甘言。聞き取れないノイズ。

「ぐ……」

「——アンタは、今度じっくり殺してあげるからさ」

「……ハハ」

「？」

浅間がエニグマの耳元で、苦笑しながら呟いた。

「——？——？」

「……寝てろよ」

捻り出した嫌味がてらの一言。届いたかどうかさえ確かめる術が無い。何を打たれた、睡眠薬か、劇薬か。頭に言葉が続かない。愉悦に浸るその顔を臍に見上げつつ、浅間宗佑の世界が沈んだ。



どいつもこいつも脆弱だ。至極当然、確固として独立した目的を持って本能で進むモノと同列に比べる事柄ではない。

「さて……」

ポケットで冷える命の名残を指先の戯れで弄ぶ。

『——』

二人同時に何かを呟く。耳に飛び込んだ音と共に、僕は視認した。<sup>オレ</sup>いずれ殺すべき影が、小振りなフォールディングナイフを握っているのを。

「——浅間に何をしゃがった」

「ちえっ。間に合ったか。もう少しで一人に減ったのに」

殆ど同時にナイフを仕舞う。当然だ、どちらにも交戦する気は無

い。

「それがアンタの本質さ、サヴァン虚偽真」

「……………何が」

我ながら、陳腐な演技だ。

「アンタの世界は一見すれば浅間宗佑と、まあおまけ程度に曆美代子、そして篠崎群青とアンタの四人から成り立ってる様に見えるんだ。でも違ってたんだよ。アンタは彼女がいればそれでいい。実質アンタの世界には——二人しか居ない」

「一人だ」

こいつは重症だな。

「アンタ、何でオレに質問を投げかけない？」

「はぁ？」

「目的、意味、手段、理由——聞く事なんて幾らでもあるだろう。エニグマというこの存在に、興味が無いとは言わせない」

「学歴コンプのクソ野郎だろ？ 別にお前の事なんざどうでもいい」

「謎は解かない主義って訳だ。そいつは放棄って言うんだぜ」

「違うな——僕の世界にお前はいない」

孤立した、閉塞空間。

全く、実に？——？、僕は。

「僕の世界に関わるな」

「領域侵犯すれば、オレを敵だとみなすのか？」

面倒臭い野郎だ。

「分かったよ、質問してやる。何が目的だ」

「アンタから全てを奪いたい」

「……………？」

「アンタから全てを奪って、アンタという存在に成り代わる」

今一つ頭が追いつかない。情報が断片的過ぎる。困惑する僕に対し、ゴキブリ野郎は尚も続ける。

「この街が空想に浸食されてるって事ぐらいは知ってるだろう？」

空想との境目を失ったこの世界——どっかの世界の空想が、そのま

まこの世界の雛型になっちまった、て話。仮説だけどね」

「で？」

「？異能生物学？」

「……」

あーちゃんが志望していた学部か。

「聞いた事あるだろ、ニュースとかで。実はあれ、人間でもやってんだぜ」

「……まさか」

「オレに心臓が無い理由、もう分かるだろう？」

そう言ってエニグマは自分の胸を愛撫し始める。上目遣いでこちらを眺めて、恍惚とした表情を浮かべながら。紛れも無く狂っている、僕も、こいつも。

「っん——そう、オレは造られたんだ」

そいつは確かにそう言ったが、そんな事は在り得ない。生命を零から作る事は不可能だ。餅は餅屋って魂胆か？

「悪いが、僕は精神病棟の患者じゃないぜ。お前と同じ惑星の電波人間じゃないんだ」

「ああ、分かってる。分かるかサヴァン、エニグマなんて存在は存在しないのさ。どこにでもいて、どこにもいない。言わばサンタクロースみたいな物だ。そう言った意味ではエニグマは人を渡る」

「知るか。お前の不幸に僕達を巻き込むな」

「不幸？ そんな易い言葉で体現出来る程に甘い人生だとても？」

自分の名前さえ覚えてないんだぜ、サヴァン」

「そりゃ頭が悪いだけだろう。僕はキツチリ憶えてる。いや、サヴァンじゃなくても覚えてる」

「存在と名前が直結してるからだ。オレには存在が無い。どうかな、もしかしたら名前も無かったのかも。分かったら、オレがアイデンティティに拘る訳が」

「分かったが、理解はしない」

「……つれないねえ」

踵を返す。出口が酷く遠のいて見えた。

「?ワタシハキミ?」

「ほぎくなよ。僕はお前じゃないし、お前は誰でもない。一人で死ねよクソ野郎」

「今日のは手馴らしさ。これではつきりしたよ、奪うべき物が」  
冷める臓腑と裏腹に、サヴァンの回路は回り続ける。

「宣言しとくぜ、サヴァン。アンタを奪いに行く」

「奪わせない。十六年かけて培った僕という存在を、お前如きに渡しはしない」

沈みきったトマト、帳を下ろすブルー。

雑音に倣って扉が閉じられた。



そして全てを解説した。ある種世の慣わしから解脱したとも言える一種の輪廻超越。存在無き物を確立する事は出来ない。

見えないわけではない。そんな事になったら物理法則が破綻する。いないだけだ。姿はあるのに居ないのだ。存在を失い自らの正体も失い、経緯は何れにせよ、エニグマという存在の目的は一つしかない。

「存在、剥奪」

そもそも異能というのは、超常的な生物全般を指して言う。

? 異能生物学?で行われている研究は幾つかあるが――代表的なのは、異能生物同士の交配、細胞の移植、その他、科学への転用の為の雑多的研究。その中には人間の特異能力を解明する分野も勿論ある。

——信じ難いし信じる気も無いが、仮に、仮に奴がそういう実験で造られた《……》人間だったとして、確固たる自分を持つていなかったとしたら。

そう。他者の存在を被るしかない。

「傍迷惑な話だ」

心底。最近の若い奴は犯罪を起こすにしても無関係な奴を巻き込むからいただけない。死ぬなら孤独に死ねばいい。

——って忘れてた。

「おい浅間」

フォールディングナイフを仕舞って揺すってみるが反応無し。呼吸は一応しているらしかった。

「……奪わせるかよ」

奪わせる物か。

虚偽真の世界を奪わせる物か。

十六年の月日を丸ごと奪われたら僕の履歴は零になる。伽藍堂となった僕如きの人生の価値を一体どこに見出すというのか。今でさえ僕には価値が無いというのに、僕から何を奪うというのか。僕の世界に残っている浅間宗佑と暦美代子と篠崎群青と、そしてその他の僅かな人達。僕の価値はそこにしかない。それを奪われたら僕の世界は真価無き本物の伽藍堂になる。

ああ、で、それを奪おうって訳ね。

畜生め。

「——奪わせて、たまるか」

一先ず救急車を呼ぼう。おっと残念、携帯電話の電池が無い。



電話一本で救急車が到着。不運な事に倒れた浅間は我らが担当医、  
安藤礼司先生が担当する事となった。

病室の一角、四〇二号室。その扉の前の長椅子に座り、僕ら三人は司法解剖の許可を待っていた——というのは冗談で、浅間の状況伝達を待っていた。

「この台詞はもう十八回目だが——また君達二人かネ」

不意に届いた罵声と共に開く扉。現れたのは伝説的に不謹慎な医者。

安藤礼司。サヴァン発症時に僕の担当医となった人類史上最強最悪の男である。恐ろしく奇怪な格好である。灰色の白衣と言うべきか、ともかくそういう服を纏い、無造作に伸ばされた焦げ茶色の髪で目を隠し、灰色のキャップを深く被っている。本人曰く、『医者とかだりい』そうだ。人外魔境の正体見たり。

「あの……先輩は……」

「死んだよ」

待て待て待て待て。

「安藤先生」

「何だネ？」

「ベッドで饅頭食らってやがるシルエットは誰ですかね」

「……バレたか」

「茶番は良いんでさっさと説明お願いします」

「——チ、讒言ぐらい愉しませたまえよ」

口に咥えた煙草は安物の下手物。他の物に比べてさして鼻を突く訳でもなく、殆ど不快感は無い。

「救急外来で運ばれて来たと聞いたからどんな重病患者かと身構えたが——貧血で寝てるだけとは中々小賢しい悪戯をしてくれるな、病院はそんなに暇じゃないぞ、虚偽真君」

「僕に言わないで下さいよ。あ、治療費は全部あのニット帽に請求で」

「把握した。それじゃ僕は領収書とか作ってくるから、ちょっと待っててネ」

「努力します」

「実を述べ」

無機質にカルテを握って出て行った。

然しそうは言っても医者としての性分という奴か、結局は最期まで貫徹して面倒を見るのだった。僕や篠崎群青がサヴァン診断を下された時も、最初はキチガイのお世話は御免だ何だとのた打ち回っていたが、今では専門担当医だ。面会全然行っていないけど。

「先輩、大丈夫ですか？」

「……まあ」

「本当、焦りますよ……」

「無事だったんだし良いじゃないの」

「そりゃそうですけど……」

服装も髪型もニット帽も代わり映えない、いつも通りのクソ野郎。浅間宗佑は紅白饅頭のクリームゾンの方を頬張りながらボーッと外を眺めていた。

いや、違った。

眼が。

その眼のしている場所が。

違う、この世界を見ては居ない。どこか別の、遠く、もっと先を。

「あーちゃん」

「んー？」

「ちょっとトイレ行ってくる」

「んー」

退室して足早にエレベーターへと向かう。

受付は一階、入って直ぐの所だ。医者の名前を提示すれば会わせてくれるだろう。何せここはいい加減な病院だから。

一階、ボタン、閉じる。がしゃん。無機質な一連の動作の間に、出来うる限りの思索を張り巡らせる。

貧血な訳が無い。普段、運動部でもないのに八キロ近く平然と走るあいつがそうも簡単に貧血如きで倒れる道理など有り得ないのだ。安藤先生が誤診？ それこそ絶対に無い。仮にも現代のブラックジャック（自称）を冠す男、安藤礼司が自らのカルテに医療ミス軌跡を描く事を許す訳が無い。

ごめん嘘、今の無し。この人たまにとんでもない事するから。新型インフルエンザが流行った時にも検査無しで『あーじゃあもう新型だろ』って言ってたし。

三、二、一。開くエレベーターの扉。目に飛び込んできたのは灰色の医者。

「——来ると思ったよ」

「いると思いましたよ」

この人にとって十六年の従者である僕らの行動ごとき、お見通しなのだった。

「即効性、しかも今時珍しい液体の睡眠薬が血管から直接投与された形跡がある。しかも元を辿ってみれば傷口は首元だ。頸動脈から直接流し込んだのかどうか分からんが——兎に角異常なまでに回りが速かったよ。下手すれば死んでたかもネ。睡眠薬の大量投与はお奨めしない。上手く死ねたら良いが、残滓が蓄積された場合の洗浄作業は識閥を漂う程のモンだから」

「……そうですか」

「さて——どういう事か話して貰おうか。首元に睡眠薬——自慰と勉強で徹夜続き、なんて訳じゃないだろう？」

安藤先生は長椅子に腰掛けて、キャップを更に深く被った。

「……そのまさ」

「茶化すな虚偽真。浅間宗佑が投与されたのは野外だろう。そうだな、お前が救急車を呼んだのは遊園地だな、どうなんだサヴァン。ん？」

圧倒的、戦力差。茶髪の奥の目が唸る。

「……そうです」



「素直で宜しいが頂けないネ。氣絶する程の睡眠薬を自分で——しかも野外で投与する様な馬鹿野郎はポン中かパーだけだ。でも違うだろう？」

脆弱すぎる。この人には勝てない。視線からして威圧感が違う。脂下がるだけの詐欺師の目と威圧するだけの獣の炯眼では揺らめきの美しさで肉薄する事さえ出来ない。

本当に人間なのかと、危惧させる様な。

「……エニグマってご存知ですか」

「あーあやっぱりネ……また面倒臭い事やってんの」

「こっちは何もしてませんよ」

「知ってるよ」

煙草の火を素手でにじり消す。

「あれだろ、天才を殺す殺人鬼って奴だっけ？ で、狙われた、と。何？ 浅間って子もサヴァンな訳？ それとも単純に勉強熱心？

染髪して黒い革ジャン着てる辺りそうは見えないネ」

「異能者ですよ。僕らと同じ。異常聴力なんです」

慌しい受付。雑踏の中、座って動かない二つの影。

「……成程、ネ。天才ってのにはそういうのも含まれる訳だ。随分と範疇に寛容な奴らしい」

灰色の白衣がぐるんと翻る。

「分かってんの？ エニグマに狙われてるって事は篠崎もヤバいって事なんだよ？」

「だから対峙します。昔から悪知恵と間接的暴力だけは得意ですから」

「そりゃクソガキって言うんだ馬鹿。とっとと浅間宗佑って言ったか、あれ連れて帰れたまえ」

「もう退院出来るんですか？」

「寝る為に病院のベッド一個占領する気かね？ 殺人鬼が病棟に乗り込んできてフロア全員皆殺し、なんてB級スプラッタ映画、見たくもない」

職務怠慢だった。

「で、希代のサヴァン、虚偽真としてはこれからどうする？ 死ぬ  
っつーか、殺されるよ、君ら」

「……」

転じるしかない。

反撃に。

「殺される前に」

「殺せないネ」

長髪を掻き揚げる。酷く乱暴に。

「今のままじゃ君は人を殺せない。機能的にじゃない、機構的にだ」  
そんな事ぐらい自分の頭でよく理解しているともさ。

「超能力ってのは信じるか」

「いいえ全く塵ほどにも」

どの口が。

「特異能力、と言ってもいい。君の場合は、サヴァンがそれだ。ん  
でまあ、多分、浅間宗佑の場合は異常聴力とやらなんだろうね」

「……」

「エニグマはそういう奴らを狙ってるんじゃないかな、多分。だから  
天才狩りというよりは、異能者狩りって言った方が良いんじゃない  
い？」

安藤先生は立ち上がって、受付を覗きに行こうとした。

「安藤先生」

「んー」

「エニグマは、？ 異能生物学？ の実験から生まれたらしいです」

「――」

数秒、灰医者が動きを止める。

「――……へええ……そうか、異能生物学……医者の身としては、  
良い噂は聞かないネ。噂じゃそういう？ 異能者？ についての研究が  
一番活発らしいし」

安藤先生なりの忠告なのだろう。不干涉主義だが、以外に面倒見

は良い。

「ま、兎も角、もう変な馬鹿はやらかさないでくれ。六年前とは訳が違う。あの頃の君は華奢な子供、今の篠崎君は良いぱいおつ。今度同じ事やったら——公然猥褻じゃ済まないからネ」

最後の最後に黒歴史を暴いてから皮肉な笑いを浮かべて受付へと去っていく。

酷い敗北感だけが身体中の隙間を埋め尽くした。

「分かってるさ、安藤礼司」

呟きは届かない。

それでもやるしかない。浅間がこうして現に襲われた以上、エニグマの演劇は冗談では済まなくなる。メディア大衆にとっちゃ喜劇でも、主格にとっちゃ惨劇なのだ。

輻鯨の急を回避し、自戒を刻んで奴に反撃しなければならぬ。

例え誰かが笑殺しようとも。

サヴァンの世界は安くない。



特に問題も無く浅間と別れ、特に何をするでもなく帰路に着く。

エニグマの襲撃は無かった。

「あーちゃん、先に帰ってて。僕は寄る所があるから」

「えー……」

渋々に尖った口元はコンクリートの壁でも貫けそうだった。

「……じゃ明日学校でね」

「うん、じゃあね」

「ああ、あーちゃん、帰り道、気を付けて。何かあったらすぐ電話

してくれ」

「？ はーい」

想定しうる最悪の事態。忌避し回避しそこから逆転しなければならぬ。英雄の条件は、逆境、逆転、自己犠牲。

「……さて」

冗談を言ってる場合じゃない。篠崎群青が角を右折したのを確認し、元来た道を折り返す。向かうべきはどこだ。資料を漁るか？

「馬鹿言え」

容量の無駄遣いだ。そんな事の為に何で脳内を汚さなくちゃならない。

要を置くべきは防衛策。仮にも向こうは殺人鬼。まして入学当時にとんでもない馬鹿をやらかした浅間を容易く沈めるのだから、相当の実力の持ち主と言う事だ。

ホームセンター。

——フォールディングナイフ一本でエニグマと対峙しようなど馬鹿にも程がある。主婦が使う包丁と殺人鬼が使う包丁ではスペック差が歴然だ。雲泥どころか天地。菜切り包丁とエクスカリバーだ。

でも金が喋る世の中、寒村と貸した僕の財布では凶器の一つも買えない。

「こう、思った物がパツと出たら便利なんだが」

特技は現実逃避、趣味は空想構築。根暗な野郎だ我ながら。

結局諦めて家に帰る事にした。

——超能力。

ワードが脳髓にしがみ付いて離れない。

サヴァン。これが一種の超能力だと言うのだろうか。だとすれば僕はこの脳髓を使ってエニグマに対抗しなければならない。冗談、覚えるだけの力で何をどうしろと。

一度見た物は必ず覚えられる。

この能力を、僕はどう使えば良いのだろう。

弾き出せ我が脳髓、サヴァンの名に恥じぬ答えを。



挨拶にしちやあんまりだったかな。

でも、このぐらいしないと警戒してくれないだろうし、そもそも狩猟ってのは狩られる側が逃走なり反撃なりの対抗手段を取るから成り立つ訳であって、只立ってるだけの木偶を殺すんじゃ虐殺と変わりない。幾ら存在証明を賭けた勝負って言ったってゲームはゲームだ。徹底的に凝らなきゃ面白くない。

でもサヴァンがナイフを持ってたのは規格外だったかな。

いや、それより規格外なのは——浅間宗佑。

異常聴力とは聞いてたから天才、つーか能力者の範疇に含めてはいたけど、あれは完全に想定外だ。うん。心音聞こえるとかチートにも程があるつーの。

大体、天才ってのは天からの才能の略なんだよな。元から生まれ持った先天的なモンな訳で、後天的に加えられたモンは何の価値も無い。そういう意味じゃ失敗したかな、努力家まで狙ったけど能力者なんざ一人もいなかったし。いい線いつてる奴はいたけど。そもそも異能力って後天的なモンだしな。

絶対記憶は病気にカテゴライズするべきなんだろうな。サヴァンシンドロームって病名があるくらい正式な疾患だし。もしこれを才能なんて言ったら、それこそ患ってる人達に失礼だ。

でも病氣って言うよりは——こっちの方がいいのかな。欠点と特徴は鏡像って言うし、なら病氣と呼ぶよりも才能って読んだ方がいい……のか？ 病人と天才の違いだろ、単純に言えば。どっちだっ  
て一緒か。

そりゃ、見たモン聞いたモン全部記憶出来るんだから才能にしゃきやあってられないよな。ある意味では障害だけど、故の苦悩も考慮したら才能にするべきだ。うん。本人が望むってのなら病気でも構わないけど。

只、浅間宗佑は確実に病気だよね。あれは。心音はねーわ。心音は。

以前にも絶対音感って奴を見たけど、浅間宗佑はなんか違うな。耳じゃねーよあれ。

サヴァンは記憶する事しか出来ない。知識はあってもいかせない。何故なら経験が無いから。そういう意味合いでは一番不便で無意味な才能なんだろうな、あれは。だからこそ他のサヴァンと違って、虚偽真には欠落点が無いんだけど。いや、あるのかな——俺が気付かないだけで。浅間宗佑だって、楽譜が読めないって対価はある訳だし。あいつの場合はそれ差し引いたって余裕で尺余りだけど。

——でも残念だよ浅間宗佑。悪いけどお前には価値が無い。お前には、生きている価値その物が、全く無いんだ。だから、お前は要らない。世界に必要とされていない。

限りなく合同で、限りなく背反。天才、故に矛盾。

そのサヴァンが化物足り得たのは——やっぱり彼女なんだろうな。群青色の、あの女神。

安心しなよイディオ・サヴァン。

もうすぐオレがアンタになってやるから。



流れは速い。時間は待っちゃくれない。

掃き溜めみたいな雑言屋敷で思索と憂悶に耽ること一時間。体感

時間のそれは大きく裏切られ、気付けば時刻は午前七時。どうにも篠崎群青と登校する気にもなれず、一人ではーっと朝露の間を渡り歩く。

「……………」

妙な色の空が僕の頭を掠めていった。

一日、常に篠崎群青の周りに気を配る。というよりは、常に周囲に目を向けていた。真昼間の遊園地で襲撃をかける様な野郎だ、昼間の学校に何食わぬ顔で潜んでいても何ら不思議じゃない。そういう意味では、僕らにとっての拠点である学校は最も油断しやすい所だろう。

ところが、流石に昨日の今日では動かないのか、そのまま惰性に過ごしてみた物の、エニグマの襲撃は無かった。

午後の授業になっても浅間は来なかった。



見舞いに行く様な柄でも無い。一人で登校、一人で下校。何とも孤独な我が人生。とりあえず近所のホームセンターに立ち寄ってナイフを二本買った。警察を恐れる様な事態に陥るとは夢想だにしなかった。現実って不思議。

実際のところ脆弱過ぎて話にもならないだろう。でも無いよりはましだ。そもそも奴にナイフなんてチャチな装備が通じるのか？

僕が知る限り浅間はかなりの喧嘩馬鹿——というよりは強豪だ。吹っ掛ける事は絶対に無いが吹っ掛けられたら容赦は無い。その浅間がああも簡単に昏倒するとは考え難い。嘗て僕と二人で十二人相手に大問題を繰り広げたあの浅間宗佑が、そうも簡単にやられるも

のか？

在り得ない。浅間はある種動物的とも言える基礎ポテンシャルを持っている。ボクシングの真似だとか、空手の真似だとか、そんな子供騙しの概念を超越して、浅間は本能だけで筋肉を動かしている。あれは力ではない、暴力だ。

——等と馬鹿な事を考えてる矢先だった。

僕の足は門前で立ち止まった。習わぬ経も読めやしない。

「……うっげえ」

両親の車がある。珍しく早く帰っているらしかった。黄色の軽と  
か何考えてんだ。

「……」

自宅の扉を潜るのに深呼吸が必要ってのはどうなんだろう。ま、  
環境的要因としては宜しくないよな、青少年の健全な育成にとつち  
や害悪だ。

「……………はあ」

溜息一つ、マイナス一ポイント。ここに篠崎群青がいたら全力で  
息を吸ってるに違いない。

「すうっ」

そして恐るべき危惧は来るべき災厄となった。

「やほー、まこちゃん」

茶目っ気溢れた笑顔を向ける篠崎群青。何笑ってやがりますか。  
男だったら鳥葬ですぜ？

「……何、してんですか」

「何って、そういえば今日一日顔を見てないなーと思って」

「避けてたんだよ」

「何故に」

「いいかあーちゃん。今日一日——学校で、僕には誰も話しかけて  
来なかった。何せ浅間も居なかったから」

「？」

「頭の上にクエスチョンマーク浮かべんな！ また出会ったら？ま



「こちゃん？とか言われるだろ！」

「何か問題でも、メイジャー上官」

「……もういいっす。で？ 何か用でもあるの？」

「いや、たまにはまこちゃんの家に上がろうかなーと  
世界が割れた。」

「はあああああああああああ！？」

「……うるさいよまこちゃん……」

「待ってくれ、それだけは——それだけは勘弁してくれ。好きな物  
奢るからさ、家は本当にまずいんだって……」

十六年。お互いの家庭事情を探る事もなく——って探る必要も無  
かったから当然だけど。硝子の割れる音が聞こえようと、怒鳴り声  
が聞こえようと、そこにだけは干渉で居た。暗黙の了解という奴  
だ。

なのに——今更になって何を言い出すんだ。

「駄目？」

「駄目」

僕より身長が高いのに上目遣い。どうやってんだよ。

「僕だけでも酷い言われ様なのにあーちゃんまで混ざったら何を言  
われるか」

まして今日は両親が珍しく家にいる。最悪の極みだ。修羅場とい  
う言葉がこれ程相応しい場所もそうそう見当たらない。その上サヴ  
アン二人で仲良く気の狂れた奴らと壁一枚隔ててイチャつく？ 馬  
鹿言え。そんなのは御伽噺だ。

御伽噺だ。

御伽噺なのに——。

「お願いまこちゃん」

篠崎群青は夢である事を望んだ。

「今日だけ。今日一日だけでいいから」

「……………チ」

どうにも弱いね、その顔には。

十六年。

十六年という概念を辞書だけで埋めてきた。美しいという単語も好きという単語も辞書でしか知らなかった。

「……今日だけ。本当に今日だけだからな？　ウチの母親が感付く前に、挨拶も無しで速攻で僕の部屋に上がるんだ」

これで全て上手く行く。

「あ」

「あ」

「あ」

一転、開かれたドアは破滅を物語る。

最悪だ。やっちゃまった。こんな大声でドアの前で話してて気付かない道理なんざある訳無かったのに。浅間じゃなくなたって気付くだろう。

「……ただいま」

見せ掛けの社交辞令、鼻を突く綻びの臭い。

「帰ってたんならさっさと入って続きやりなさいよ——って、何、そちらは」

「……篠崎群青さん。ほら、小さい時によく遊んでた」

「こんにちは。隣に住んです、篠崎群青です。まこちゃんと同じ学校の——」

眼球を手品師が挿げ替えた。それもまあ、ぎょろりと見開かれた随分と出来の悪い粗悪品に。見るも無残な腐れ眼。死んで腐った鯖みてえ。

「どういう事、アンタ」

「……どういふ事も何も、僕にだって友人の一人ぐらいはどうでしょうね。」

「暗記放ったらかして女の子と遊ぶってーの？　もう良いわ、好きにしたら」

一々短気な野郎だ。本当に僕の母親か、こいつ。僕も相当短気だけど。

「言っとくけどね、病人に出す茶も無いし、くれてやる労力も無い。どうせそれしか能が無いんだから」

「ふざ——」

短気はお互い様、醜悪さ加減はやっぱり親子のそれ。僕の台詞を右手一つで制した篠崎群青の方が大人だった。

でもいいのかよ篠崎群青。

怒りを忘れるその概念は、僕とは違うモノだけど。

それでも、そいつは悲しいって事じゃないのか。

間違ってるだろ、そんなの。

「……分かってる、僕の部屋に行くから。極力静かにするし、部屋も散らかさない。下にも降りない。茶も出さなくて良い」

「ご迷惑おかけします」

頭を下げたその姿が、酷く心を痛め付ける。有刺鉄線でも握ってた方がマシってもんだ。

違うだろ——根本的に違うだろう、その概念は。

心の奥で分かっているだろう篠崎群青。

そいつは違うって、それは間違いだって、分かってんのに何で擁護してんだよ。

——怒りと一緒に何か大事なモンまで忘れたのかよ。

「……それじゃ上がって」

「あ、お邪魔します」

靴を脱いで、階段を登って、扉を閉めて閉塞、鞆を放ったらかして畳に胡坐。僅か四畳半の空間に二人きり——心地良さは至福の最上級。場所がここでなければ。

「うーん……なんか、まこちゃんの部屋って……」

「だから上げたくなかったんだよ。大した物も置いてないし」

ある物と言えば机と毛布と布団だけ。窓は二箇所のみ。そして雨戸は閉じられている。別に戦隊物のフィギュアが飾ってある訳でもなく、ましてアニメのポスターが飾ってある訳でもない。只存在する為だけにある部屋。下手すれば悟りも開けそうな勢いだ。

布団に寝転がる篠崎群青。待て待て待て、スカートの丈に気を配れ。

「あーちゃん」

「んー？」

「抱きたい」

「駄目」

そりゃそうだ。

「こんな家なんだよ」

仕方ないので僕は懺悔を始める事にした。

「価値観ってモンが根本的にズレてるんだ。物事を考えるに当たって最も重要なプロセス、規範とすべき事柄の定義付け——まずそこが間違ってるんだ」

あれ。

「不愉快だったろ、さっき。ごめん。どうしようもないんだよ。僕が国語辞典を暗記した頃からおかしくなり始めた。どんどんレールを外れて行くんだ」

これってもしかして黙った方が良いのか。

「記憶しか頭に無いんだ。サヴァン症候群ってのをハードディスクか何かと勘違いしてる。だから僕は友人を持つ事さえ許されない。娯楽の類も許されない。まあ、深夜アニメはこっそり見てただけど」

塞がれ口。みつともねえぞ。

「僕はこの家が嫌いだ。酷く嫌いだ。あの母親も、父親も、全て、全て、この家の全てが嫌いだ。この空間でさえ落ち着かない」

恥さらしめ。てめえは露悪癖でも持ってるのか。

「———そうかな」

何で笑うんだよ。

「あーちゃん、何でだ。違うって思ったのなら違うって言えば良いじゃないか」

「うーん、何と言うか」

そしてサヴァンは知る。自らの基軸が桁違いだという事を。

「どうでもいいじゃない」

「……………」

「私はさ、別にまこちゃんのお母さんが居なくても生きていけるじゃない」

「…………まあ」

「真ん中が倒れちゃったら立てなくなるけど、別に他はどうでもいいし」

違う。

そんなのは——そんなのは自己犠牲論だ。自分が卑屈になつて諍いを避けてるだけだ。間違ってる。

「……………そう、なのかな」

おい待て言えよ、賢い馬鹿野郎。イディオ・サヴァン間違ってるって感じたんだろう。なら何故そいつは間違つてると言葉にしてやらないんだ。矛盾してるぜ。

「……………そんなのおかしいだろ、間違ってるって分かってる筈だ。どうして、どうして言わないんだよ」

「間違いを決めるのは私じゃないから」

肋骨の隙間を縫って、放たれた鈍器が心臓を一際強く打った。

「——私の家もね」

布団から這いずり出して僕の隣に座り込む。あああやばい。やばいぞこれは。抑制リミッターがオーバーヒート。駆け抜ける稲妻は愛の証明——って何言ってるんだ。

「似たような物なんだ。昨日、ちよつとあつて。だから今日はまこちゃんの家に来たの」

本能と理性が葛藤する。

「まこちゃん。私ね、白が好き」

「…………白？」

「白は、綺麗でしょ」

「…………うん」

白いまま。

違うんだよ、あーちゃん。

「僕は蒼がいい」

「蒼？」

「群青色が、特に」

「……ませてんなー、おい」

白は綺麗だ。

でもあーちゃん——君は知らない。

白は。

白は——いや、やめておこう。世の中の間違いを決めるのは僕じゃない。

「あーちゃん」

「んー？」

「すんげえ抱きたい」

「駄目だって」

「じゃあ抱き締めたい」

「許可します」

思わぬオーケーサイン。気付けば僕は蒼海の中に居た。

「……ねえ、まこちゃん」

「んー」

「居てくれたらそれでいいよ」

「……んー」

しな垂れかかる柔らかな肢体。押し倒される無力な身体。

津波が僕を呑み込んだ。

「ねえ、まこちゃん」

言葉でさえも艶かしく。

「なにさ」

頬を撫ぜる黒髪は蜘蛛の糸。

「明日世界が終わるとしたら、まこちゃんは何する？」

目元が、口元が、胸元が、足元が、全てが目線に流れ込む。

「とりあえず、あーちゃんの家に行く。そして逃げる。どこまでも」  
筋書かれた視線を物語ろう。羞恥の上で踊ってやる。

「どうして？」

艶美に笑う。不敵に笑う。大胆に笑う。蠱惑に笑う。最初から答えを知っているのに、それでも彼女は確認する。僕をこの上ない恥辱に陥れる為に。

互いの世界を、支える為に。

まるで軸を失った不安定な世界が、二つ寄り添って支え合う様に。

「それはね——」

いつか交わされた不思議な約束。烏肌総立ちの青臭い台詞。

恥など無い。外聞も矜持も捨てて魅せよう。全てを捨てて君に尽くそう。それこそが僕の矜持だから。僕が僕である為に。

「あーちゃんの為に世界を失っても、世界の為にあーちゃんを失いたくはないから」

サミュエル・ジョンソンの言葉だ。

最高に青臭い。

けど。

けど僕は——この言葉が好きだ。

触れる唇。その刹那さえも愛おしい。

名残を引く欲情の糸、恍惚に微笑む僕の全て。

「よく出来ました」

そして重なる二つの√。

互いが望み、互いが求め、互いが受け入れる。

なればこそ、僕らは究極の共生関係。愛という矛盾の完成形。

その蒼い海の中で溶けよう。

君に溺れて死んでやろう。

ウルトラマリン

群青の、その色に。

◆  
エデンの後の散歩道、頭の中は真っ青だった。ある種の脳内麻薬だ。収まらない鼓動。ドキドキとワクワク、素晴らしいねこの臨場感。

「最高だ」

心が躍る。比喻ではなく、心が躍る。縞馬とフラダンスでも踊ってやる。心臓の内側から流れてくる妙な高揚、夜風の低温と相まって重なる波長。上手い具合に練り混ぜられる微熱と微風。気分が良いつてこういう事だな。

「気分が良いつてこういう事だな」

大事だから二回言っただぜ？

「あーもう今なら死でも甘んじて受け入れてやるよ畜生——なんて冗談はやめた方が良いな。下手な事になり兼ねない」

「全くだぜ眼球野郎」

本当に下手な事になっちゃった。

「……………」

「よう」

ニット帽はコンビニの袋片手に会釈した。補導されちまえ。

「……浅間宗佑さんですか？」

「サインなら色紙で」

「色紙代わりに首元にサインをお願いします」

「草野球のルールブックにヘッドバットは載ってねえな。他をあれ」

ああ、浅間、生きてたんだ。

そうか、僕が通報したんだっけ。生きてたんだよな。けど——あれ、なんだろう、これ。

馬鹿みたいに、どうでもよく思えてくる。



「学校の次は病院か？ 放任主義者の猫だってそんなに脱走しない」

「追い出されたんだよ、ステイーヴ・ヴァイみたいな野郎に」

いや、確かにギタリストっぽいけども。

「……で？ 大丈夫なのかよ。安藤先生の話じゃ下手すれば死んでたって聞いたけど」

「別に。気怠さは残るが——そんなモンだろ」

「眠そうなのは元からだからな」

「言ってる」

首元を抑える浅間。月の光が鬱陶しい。

「殺人鬼エニグマ、ね——ハ、どうやら噂はマジみたいだな。

どっかの気狂いか猟奇小説マニアが流したホラかと思ってたが……

冗談じゃねえ」

「警察に行こうか」

「はあ？ 阿呆拔かせ」

「奇遇だな、僕もそう言おうと思ってた」

隣を過ぎ去る一台の車。騒音が無慈悲に流れた。

「あいつは僕になろうとしてる」

「——なろうと、してる？」

馬鹿馬鹿しい話だ。常識的に考えて有り得ない。自分の出生が分からないから他人の存在を拝借しようなんて考えは。

「僕を取り巻く環境、僕の思考、癖——何から何まで模倣して、特に身近な所を全部リセットして——それから僕になるつもりなんだろ」

「お前の話がややこしいのか、俺の頭が悪いだけなのか——どっちにしろイカれてる」

「だから困ってるんだ。分かるだろ浅間、あの阿呆は本気なんだ。もしもがあつたら、あーちゃんに宜しく」

殺人鬼なんてのは、そもそも何を考えてるか分かったもんじやないから。

だから。

「まああれだ、死ぬのは僕だろ」

一瞬だった。

ニット帽が僕の胸倉を掴み上げるのに、衰えたその肉体でさえも、やはりそれは一瞬だった。

「死ぬのは僕だ、なあ？ 舐めた戯言を吐かしてんじゃねえよ」

陰る。群雲が獲物を取り囲んだ。

「いいかサヴァンよく聞け。てめえが死ぬのは勝手だ。身勝手過ぎる程てめえの勝手だ。それがお前一人の問題ならな」

浅間宗佑が牙を剥く。焼け切れそうな神経を奮わせて。

「てめえ一人死んで済む話か？ 自分のモンぐらい護ってから死ねよ」

ああ、分かっている。分かっているさ異常聴力。だからこそ僕に退路は無い。

「死ぬなら勝手に死ぬ。てめえの辞世の句なんぞに興味はねえし、言伝なんざ伝えるモンじゃない。俺はやるぜ」

「ああ、分かっている」

「やってやるんだろ？」

質問ではない、確認だ。

「僕は決めたよ、浅間」

そう。

確信した。

僕に意味が無いのは、彼女無しでは存在出来ないからだ。言うなれば車と鍵の様な物。彼女が車で、僕が鍵。車単体なら何とでもなるが、鍵単体ではどうしようもない。

それでいい。

付加価値の人生。

サヴァンという、虚偽真という、おまけの人生で構わない。

僕はそれでも構わない。彼女あったの僕が良い。

だから、僕は。

「パーカー野郎をぶち殺す。死には、死だ」

「やってやろうぜ、我が相棒」

それはいつかの馴れ初め話。

鬱屈からの解放、明らかにやり過ぎた報復の概念の時。端的に言えば苛めっ子をぶっ飛ばした時。その時から僕ら二人は問題児になった。

いや、或いは命題児。

絶対音感と異常聴力。揺らぐ事無き生への表題。一生を賭けて求めるべき、その命題。

「虚偽真」

「浅間宗佑」

中空でぶつかる拳は闘争を焼き直す証だった。さながら影は√の様。

殺らなきゃ殺られる。それだけの単純なロジック。警察だとか犯罪だとか、そんな諸々の概念は既に頭に無い。僕らの頭は確実にどうかしていた。

けれど僕らは後に知る事になる。

奴の頭は、もっとどうかしてたと。あれだあれ、ライバックとマクレーンみたいな違い。どっちにしろ平和を蔑ろにする事に変わりは無いけど。

ま、平和の為に平和を崩すなんてよくある話だ。浅間宗佑曰く、均衡を壊す事によって保たれる均衡もあるらしいし。

狂ってみようか、イデオ・サヴァン。

殺人鬼相手に機械如きがどこまで出来るか——疑問符をつける余地も無く解答用紙は白紙になる。ましてそんな疑問符を自戒したところで免罪符にもなりやしないし、世界の不平等を託つ理由にもならない。分かりきってる。

それでも僕らは拳を握る。

冗談じゃねえ、殺人鬼なんて空想の中だけで十分だからな。

妄想都市の真ん中で、僕らは空想相手に刃を向ける。

『——背中、頼むぜ』

かくして火蓋が落とされた。  
二つの存在証明を、或いは三つの存在証明を賭けた、一つの闘争の火蓋が。

■ 2. E N D

### 03 パーカー野郎とショットガン（前書き）

佇む謎の傍に転がっている、一人の教師。

否、教師だったモノ。真っ赤に染まったそれは西陣織より遥かに綺麗だった。

立ち尽くす僕と浅間。

その横をすり抜ける生徒達。

僕らと相對する黒い学生服、十六人。

何より畏怖すべき、僕らの鳥肌の創造者。

再三告げるけど、僕らの眼球をブチ抜いたのはたった二つのキーワード。

パーカー野郎と、ショットガン。

### 03

### パーカー野郎とショットガン

最初に前述しておくが、この話は夢オチだ。



ねえ、そこのお兄さん方。ってちょっと去らないで、お願いだから。風俗の勧誘とかじゃないからさ。ね？

割のいいバイトとか紹介してるんだけど、どう？　ってだから去らないでってば。人の話は最後まで聞こうぜ。だからさ、バイトよバイト。アンタらってここらじゃ結構ならしてる——不良集団なんですよ？

あ、御免なさい。怒らないで、うん。お願いだから。撃ちたくないから。

聞き覚ええない？　浅間宗佑って。

その表情——知ってるよね、やっぱり。あいつの悪名は結構轟いてる筈だから、色々と揉め事ありそうなアンタらなら絶対知ってると思ったんだ。大当たり。

いや、ちょ、だからそこでキレないでって。オレは話があって…。

ん？ いや、女だよ？ 触ってみる？ ほれ。ね？ あ、さては童貞？

ってそんな事どうでもいいんだ。本当は言いたくないんだけどさ、巷で流行ってるエニグマってのあるでしょ？ あれがオレなんだけどね。

ッだーから逃げるなって！ こっちは真面目な話持ってきたんだから。

いや、簡単な話なんだよ。

オレは浅間宗佑を殺したいんだ。多分もう一人おまけが来るけど——そっちは問題無いかな、うん。寧ろ殺されたら困る感じ。アンタらも浅間宗佑に恨みとかあるでしょ？ 積年の激突的な。無い？

あそう。でも気に喰わないでしょ？ ホラ、やっぱりそうだ。

でね、ここに一本の凶器がある訳。

何、茶化すなって？ 上手い事言うね。こいつと掛けたんだ。でも残念、本物だよ。銃弾も出るし、その気になればアンタら二十六人ぐらいいは四半秒で殺せるんだ。信じてくれた？ ならおっけー。オレに敵愾心とかは無いから。

さて本題。アンタらに誘拐を頼みたいんだ。

オレが殺したいのは二人。浅間宗佑と、その後輩、まあ、彼女か。だからアンタらにはさ、浅間宗佑の彼女を誘拐して欲しいんだ。うん？ 浅間はどうすんだって？

これが肝心なところでさ。オレももう一人誘拐するから、そいつらを餌に浅間宗佑を誘き出す訳。まあ早い話が、あんたらにはオレが今から案内する場所について来て欲しいんだ。そこに出てきた浅間をやっちゃって、て事。

じゃ、手筈の確認と行こうか。

まずアンタらは暦美代子を誘拐する。次にオレがもう一人のキーパーソンを誘拐して、そいつらを餌に浅間宗佑とそのおまけを校庭に誘き出す。そこを好きな様にやってくれればいい。理由はまあ、何とでもなるんじゃない？

ああ、あと。

誘拐したら、その後は好きにやっちゃっていいよ。  
どうせ、オレは僕になるんだから。

……え、何、断るの？

ちよつと、あ……指が滑っちゃった……。ごめん。許してね。て  
へっ。

こらこら、胸倉とか掴まないの。怒るよ？ こら。

ずどーん。あーあ、言わんこっちゃない。

——うぜえな、殺すぞコラ。自覚してんのか？ アンタら。

こいつはお願いじゃなくて命令なんだぜ？ 都会に沈むか都会に沈  
めるか選べって事なんだよ。オレに指名手配掛かってんの知らねー  
のかよ。分かったらとつとと拉致って来い。

何ならもう一発イットく？



「おはようまこちゃん」

「おはようあーちゃん」

待ち合わせ場所には制服姿の篠崎群青が居た。月曜日程登校が憂  
鬱になる日は無い。忘れ物を取りに帰る気分似ていた。

「ね、浅間君は？」

「例によってゴキブリ並みに活発だった」

「何その酷い例え」

「だって殺しても死なないだろ、あんな奴。殺虫剤無効化の上に対  
新聞紙絶対防御。勝てる訳が無い——ってのは冗談で、割とピンピ  
ンしてたよ」

目元がやや濁ってたのはさておいて。

「そっか。じゃ良かった、んだけど……何で倒れてたんだろ」



「安藤先生が貧血だって言ってたじゃないか」

違う。篠崎群青もサヴァンなんだから、一度聞いた事を忘れる訳が無い。本当に貧血なのか、という意味が込められていた。

「……まこちゃん、何か知ってるでしょ？」

「うん」

隠す意味は無い。隠す理由も無い。炯眼が語る。

「そっか」

「ごめん」

「いいよ」

「うん」

僕の判断は常に一歩手前で地雷を踏む。

「ねえあーちゃん」

「んー？」

「今度デートにでも行こうか」

「恋人っぽい響きだね。デートって」

「じゃあなってみようか？」

「もうなってるよ」

「そうだった」

「あはは」

この日も、思えばそうだったんだろう。

「あーちゃん、身辺に変わった事とか無い？ 誰かに尾行されてるとか」

「刑事ドラマの被害者じゃないんだから……」

「そっか。ならいいんだけどね」

ここでせめて何かしらの忠告をしておけば——もしかしたら忌避すべき最悪の事態だけは避けられたかもしれないのに。

「じゃ、また放課後にねー」

「うん」

「——あ、まこちゃん」

「ん？」

なのに。

「今夜、どっか食べに行こっか」

「了解っスー」

内心、思いつきはしゃぎ放題だった。  
なのに。

とうとう僕はこの日、人殺しになる。



午前八時。登校してきた浅間宗佑の顔は酷く不機嫌そうだった。

「……はああああああああああああああああああ」

着席するなり臓腑の底から溜息。多分五十ポイントはやられてる。

今日は一段と睨みが利いているらしく、眼光がやけに眩しかった。

「何だよその眼は」

「何でお前なんかにあんな素晴らしい姉貴分がいるんだ……常識的に考えて奇怪だと言わざるを得ない。死ねよ」

「あーちゃんか？」

「ああ……さっき会った」

ニット帽が机に叩き付けられた。

「何故だ！ オレに笑いながら手を振ってくれる様な人が——何でお前の姉なんだああああああああああああああああああ！ あああああああああ畜生お羨ましいじゃねえかあああああああああああ！」

「分かった分かった。とりあえず苦しいから手を離せ」

首を絞めてガクガクと揺さぶる金髪。そこいらの殺人鬼よりよっぽど恐ろしい、殺意なんて言葉じゃ体現出来ない妬み嫉み恨み。

「この世界の敵め」

「そりゃどうも」

目前に鏡は無いけれど。

「おかしいだろ……圧倒的な世の中の不条理だ……学力で負けるなんて事はどうでもいい——只これだけは我慢ならねえ……何故……何故お前はあんな美人と……」

「適材適所って言うだろ？ 僕にはあーちゃんしか、そしてあーちゃんには僕しか合致しなかった——それだけの話だよ」

「さざりと言う所が余計腹立つんだよこの野郎！」

浅間はそう言って机に顔を突っ伏した。訳の分からん野郎だ。

迫る始業のチャイム。窓の向こう、日差しに照らされたその場所は二年二組。篠崎群青が座る一角だった。

「共生関係じゃねえよ、お前とあの人は。お前の笑顔とあの人の笑顔じゃ決定的に違うモンがあるのさ。どうせ自覚してないだろうけどな、お前、眼が笑ってないんだよ」

ここ最近髪の毛のセットさえしてないから鏡を見ていない。というか普通鏡の前で一人で笑う事は無い。余程の変人じゃない限りは。

「あの人の眼には？楽しい？って感情があるのさ」

「僕には無いってのかよ」

「ああ。無いね。お前、欠けてるよ」

重苦しく響く最後のワンフレーズ。忠言に似ていた。

「虚偽真、お前には笑顔が欠けてる。サヴァンだから、なんてのは免罪符にならんぜ。あの人と喋ってる時でさえ、お前の眼球は別の何かを見てる」

「そんな事無いさ。僕の眼には篠崎群青しか映ってない」

「嘘つけ。何も映ってないんだよ」

「そりゃ僕の眼が元々濁ってるからだ」

適等だった。眼なんて滅多に覗かないからそもそも記憶してない。

「俺はそいつの正体を知ってる」

「……お前さ、言いたい事があるならもっと簡潔に言えよ。観覧車

の時だって訳の分からない道草ばかりして漸く結論だったじゃないか」

「篠崎群青は虚偽真がいなくても生きていけるよ」

弩級の魔弾が放たれた。僅かに心を揺らす亀裂。危ない危ない。

「お前の目に映るのは？恐怖？さ。世界の中心が消えちゃったら、僕は一体どうすればいい——ってな」

有料の拍手喝采でも送ってやりたい気分だった。勿論着払い返品不可で。

「俺と同じ眼をしてるって事がどれ程重症か、分かるだろう？」

？——ワタシハキミ？

「ほぎくなよ。僕はお前じゃないし、お前は僕じゃない」

「けど事実だ。兎も角お前の眼には、恐怖がある」

世界の基軸を失うという、底無き剥奪の概念。

「でもあの人の目には無い。お前は篠崎群青が死んだら困るけど、

篠崎群青はお前が死んでも困らない。そいつが真理さ」

「僕と彼女はイコールだって、お前が言ったんだろ」

「ああ。だが、僕の価値は彼女じゃない——それもお前が言ったんだ」

その通りだよ浅間宗佑、完答過ぎて添削の余地も無い。サヴァンの捻り出した反撃は実に稚劣で陳腐だった。

「美代子ちゃんだってそうだろう」

鳴り響くチャイム。十二秒間の鐘の音の後、浅間はボソリと呟いた。

「……かもな」

消える様にか細い声で。

教師が入ってくると同時に僕らは黒板に向き直った。それきり言葉は無しで行こう。

——そう思ったのに。

「はい、じゃあ今日は教科書の八十七ページ……」  
轟音。

不意に何かが炸裂した。

「……………ジ？」

それは誰もが聞いた事のある音。

けれど誰も聞いた事の無い音。

意識は正常だ。全員が啞然とした。なら尚更正常だ。静まり返ったこの空気も正常だ。にも関わらず漂う異質な空気。教室全体を何かが丸く包み込む。次いでグラウンドから上がる叫び声。女も男も、誰も彼もが逃げ惑っている様だった。

そしてまた一発。

絶対的な暴力の証明。ショットガンの音が、響く。

「何だあ？」

「……」

「……」

教師が窓から身を乗り出す。倣って僕と浅間と、それから周囲の生徒も窓から身を乗り出して遙か後方、グラウンドへと眼を向ける。

「ッ……………あ……………」

先に視認した筈の教師よりも早く浅間が絶句した。

僕の視力は平均よりやや上だ。少なくとも二以上はあるが——それでも、人間という生物上、それを見る事は不可能だ。遙か遠方、二百メートルは離れている後付のグラウンドに佇むその影を微細に視認するなど有り得ない。

眼ではない。

感覚的に視認した。

その？謎？を。

烈風が吹き荒れるグラウンド。逃げ惑う生徒の他に幾つか見える黒い制服。この学校は私服だから別の高校だろう。

それよりもその遙か後方。

只一人、黒い、黒い、黒い、どす黒い、とてつもなく黒い殺意を、何かを携えて立つ誰か。

「……………冗談」

「何だ？ 何か見えるのかお前ら」

答えは返さない。僕は鞆からスタンガン（自作）一個だけをポケットに。浅間はニット帽を被って。

「七原先生、ちょっとお願いなんだけど、生徒を体育館に避難させようか」

そして僕と浅間は椅子を蹴り飛ばし、爆ぜた弾丸の様に飛び出した。

あー、おい。

これはあれだろ？

襲撃って、やつだろ？

「やっぱいぞ浅間あ！」

「クッソ！ 朝っぱらから学校に襲撃だあ？ 何考えてやがんだッ」

「後先を考えてないのは確かだッ！」

疾駆、爆走。教室の影が吹き飛んでいく。階段を殆ど落ちる様に思い切り滑り降り、只管にダッシュ。漸く辿り着いた玄関先、靴箱から乱暴に下靴を取り出す。息が苦しい、日頃からもうちょっと運動しとけば良かった。

「グラウンドは左だったな！」

「お前そっち右！ どっち行くんだよ！」

やばい。サヴァンとした事が運動場の場所まで忘れてやがる。それ以前に右左の概念まで忘れてやがる。反して身体ってのは頭と違って本能的に動いてくれるから有難いってモンだ。

「エエエニグマアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

浅間宗佑が絶叫する。体育館の真横、開けた視界のグラウンド。

「——ありゃ、先に来ちゃったよ」

僕らが視認したのは至極単純な風景。

恐らくは体育の授業中だったのだろう、泣き叫びパニックになつて逃げ惑う体操服姿の生徒達。男も女も関係無い。

次いで恐怖の元凶。

佇む謎の傍に転がっている、一人の教師。

否、教師だったモノ。真っ赤に染まったそれは西陣織より遥かに綺麗だった。

立ち尽くす僕と浅間。

その横をすり抜ける生徒達。

僕らと相對する黒い学生服、十六人。

何より畏怖すべき、僕らの鳥肌の創造者。

再三告げるけど、僕らの眼球をブチ抜いたのはたった二つのキーワード。

パーカー野郎と、ショットガン。



常識を逸脱とかそういう次元じゃない。緊迫した極限下を裂いたのは浅間だった。

「最悪を味わう度にこの台詞を言ってきた。もう何度言ったか分からない。だが今日ほど似合う日は以前も以後も無いだろうぜ――

――冗談じゃねえ」

「……」

浅間の言う通り、状況は最悪だった。エニグマはそれを眺めて、以前と同じ服装で、やっぱりパーカーのフードを取らずに佇む。

退学云々の下らない話はどうでもいい。取り巻き二十六人も別に問題じゃない。僕と浅間の腕が衰えてなければ、多分。

問題は三つ。

一つ目は学校という場所。縞馬の群れみたいな物で、端的に言う

ならば獲物の塊。

二つ目は篠崎群青、暦美代子という存在。本命は多分こっちだろう。意地でも逃がさなきゃ。

何より三つ目。

？茶髪ツインテール＋ショットガン？なら笑い話で済むが？エニグマ＋ショットガン？となると惨劇より尚更性質が悪い。

「敏感だね、浅間宗佑。アンタやっぱり早漏だ」

「戯言はいい。何考えてやがる」

「何って……」

くりくりと髪を指に絡めて遊ぶエニグマ。一瞬でも愛らしいと思った自分を茶毘に付したい気分だぜ畜生。

「前にも言ったら、オレの目的は虚偽真になる事なんだ」

「……馬鹿だろう、お前。こんな所にそんな物騒な物担いで出てきた時点でお前は僕にはなれないよ。それに、もっと別に——お前には、僕になれない理由がある」

「同感だな。それにそう簡単にはやらせねえ」

ズドン。うるさい。打ち上げ花火の方がまだマシだった。銃弾は

浅間のすぐ横、足元の地面へとめり込んだ。

「アンタは黙ってろよ。今は関係無いんだから」

「そう言うなよ。一緒に漫画読んだ中じゃねーか、ん？」

浅間はおどけた様子で挑発する。

「音楽センスはどうかと思うけどね——にしても浅間宗佑、何でそんなに強気なのかな。これだけアンタの敵がいるってのに」

黒い制服。そう言えば何度か見かけている気がする。隣の高校か？

「……おい浅間。もしかしてとは思うがこの方々は」

「？強敵？と書いて？とも？と読む」

この大馬鹿野郎。その闘争時間を勉強に回せ。そんなだから模試で指折り十番以内に入るんだよ。勿論下から。

「浅間宗佑——見覚えあるだろ、こいつらにさ」

「……ああ、よく憶えてる」



茶髪も金髪も黒髪もパンチパーマも金属バットもナイフも鉄パイプも鎖もどいつもこいつも剣幕がすげえ。雀ぐらいなら射殺せそう。つーかまず時代錯誤。

「またお前か……」

「ゲーセンで負けたからって絡んできたんだよ。俺のせいじゃない」「ああ……なら良いけどさ」

間違っても良くは無い。むしろ最悪。この馬鹿のせいで今正に窮地。修羅場、ゲヘナ、地獄絵図。

ズドン。ああもう何だようるせえな。

「ああもう何だようるせえな」

先に言われた。

「じゃ、頼んだよ皆。オレはここから眺めとくからさ」

「……何がしたいんだよ、お前。僕と浅間を殺したいのか、それともあーちゃんを狙いに来たのか？」

「別に、今日はちょっと遊ぼうと思ってさ」

気を抜くと……いや、抜かなくても殺される。幾ら相手が女とは言え——ってそんなのはハンデにならなかった。冷静に考えたら殺人鬼だし。只でさえショットガンを持ってる相手に丸腰でどう勝てと。物理的に不可能だ。

「安心してよ。オレは撃たないからさ。多分全員にリンチされる方が早いだろうしね。そうだろ浅間宗佑、オレ一人に遅れを取るようなアンタに昔の様なキレは無い」

その言葉に隠された死の伏線。ニット帽の察知は迅速だった。

「……昔？ お前、いつから俺の周りにいやがった？」

「二年ほど前からだよ。気付かない内に、アンタの周りの誰かになつてたかもしれないぜ？ 存在証明が無いって事は、誰にでもなれるって事なのさ」

「二年もの間ずっと、虎バサミに掛かった獲物を眺めてた訳だ。人外魔境め」

「ああ。申し訳ないんだけど、浅間宗佑の人生は今日で終わると思

うよ」

くい、と振り上げられるショットガン。

「――朽ちな、童貞共」  
アマチュア

銃口を空へ向けて一発、放たれた弾丸は同じ大地の何処かへと。  
それが合図だった。

「行くぜサヴァン」

「任せろニット帽」

随分と威圧的な祝辞の円陣だ。背中合わせで中心に二人ぼっち。  
でもこんな奴と死に際まで添い遂げたくねえ。だから僕らは神経を  
尖らせる。

群がる烏合の衆、総計十六人に及ぶ圧倒的な暴力を、僅か二人で  
殲滅――そんな馬鹿な話が起こり得るのか？ 在り得るのか？

――起こしてみせる。起こしてやろう。起こさなきゃ死ぬだけだ。

『背中、頼むぜ』

爆ぜる戦況。一人目の殴打を回避して首元へと電流。左右から対  
を成して襲い掛かる二人目と三人目のストレートをしゃがんで回避。  
即座にスタンガン。次いで三人目の足を引っ掛けて首元へバチリ。  
ハ、脆すぎる。

「何の為に腕が付いてんだあ？」

「僕はインテリなんだよッ！」

不自然なまでに薙ぎ倒されていく黒服の学生達。その首魁は浅間  
だったりする訳で。

四人目の蹴撃を前転で回避、大事な所にスタンガン。

「あふうッ！」

気絶する程気持ちよかったんだろうか――って冗談はさておいて、  
すんげー痛そう。僕が男だったら死んでるな。いや、男だけど。

「……………」

畳み掛ける様な猛攻。その中で浅間が叫んだ。

「エニグマの心音が遠ざかってやがるッ！」

――あ？



「動くなよサヴァン」

「知ってるかエニグマ、電流で豚を焦がす料理があるらしいぜ。スタンガンの味見をする気はないか？」

「自伝はよせよ。浅間宗佑は？」

「現実仕様の格闘ゲームで対戦中。多分連戦連勝」

「何だよ、アイツが来なきや意味が無い」

「ショットガンの矛先が、移る。やめろ。やめろ。やめろ。やめろ。ふざけるな。待て。よせ。やめろ。やめろ。やめろ。やめろ。撃つなよ。撃つな。」

撃ったら。撃ったら。撃ったら。

撃ったら——ソレデボクニナニガデキル？

「篠崎群青、だよね」

「……そうですけど」

「悪いけど——アンタはもう戻れない。恨むなら虚偽真を恨みなよ」硝子碎きにまた一発。力を誇示する餓鬼の様だった。今日一日でどれだけ被害が出たやら知れない。生徒指導担当の先生ご苦労さん。願わくばこのご時世においても彼に残業手当が出ます様に。

「やっぱり——アンタは残して正解だった」

「てめえ、あーちゃんをどうする気だよ」

「だから、オレは何も」

「——間接的に何をするのか聞いてんだよ、クソ野郎」

人混みを割って入って来るニット帽。流石の浅間でも多少息切れしていた。ぶら下げられた両腕の先、拳には幾らか血が付いていた。

「来たな。これで全員揃った訳だ」

必要な駒は、と一人で呟く。ショットガンを僕らに向け

「っ触るなァ！」

たまま篠崎群青の方へと歩く。

「神経質過ぎだよアンタ。別に何もしやしないさ」

黙れ。お前如きが彼女と声を交わす事さえおこがましい。

エニグマは、座っている彼女の後ろへ。その気になれば確実に三人ともを葬れる位置だった。

「さて——よく聞けサヴァン。今オレの手元にある駒は二つ。篠崎群青と、暦美代子」

「みっ……」

「……てめえ」

言葉は要らない。

今言葉を掛けたら——是非さえ問わずに殺される。

「睨むなよ、まだ終わった訳じゃない」

こいつ一人を除いては。

「暦美代子はさっきの残党が今頃拉致ってるよ。アンタら二人を同時に選んだ理由はたった一つの共通点、世界の基軸無しでは生きられない事。雪球より崩れ易い」

気付けば浅間が倒れていた。

遅れて音が飛んでくる。

ショットガンの、音が。

「——！」

「浅間！」

「安心しなよ。足一つ潰しただけだ。本番はここから」

ぼたぼたと落ちる鈍色の血液。群集から悲鳴が上がる。

歩み寄るエニグマ。篠崎群青の背をショットガンで押し、両手を挙げさせて。映画でしか有り得ない様な光景を、しかし僕らは現実で見ていた。

「……暦とあーちゃんをどうしようってんだ」

「知りたきゃ追って来ればいい。心臓一つを犠牲にして救出のチャンスを保ち変えても良いのなら」

生徒達の畏怖の眼差しは、僕ら二人にまで向けられていた。

「日が沈むまで軽く六時間はある。ゲームの開始時刻は今から二時間後、十三時。オレが携帯でアンタらにヒントを出し、アンタらが場所を突き止める。それだけの単純なゲームさ」

絶望的な概念差。

僕だからこそあえて言うけど——気が触れてやがる。

「……何考えてんだお前……美代子に何かしやがったら……殺してやるぞ……」

「ここで死ぬか？」

再び向けられる銃口。止める術も無い癖に、気付けば僕はエニグマの胸倉を掴んでいた。

「いい加減にしろよ——人殺しをゲーム感覚でやるんじゃない。暴力ゲームのやり過ぎだ。文明社会の弊害だな」

「殺人鬼に？常識？を求める方が間違ってるのさ。兎も角——日没までにアンタらがオレの潜伏場所を見つけれればアンタらの勝ち。見つけれなければアンタらの負け。それだけだ。伝える事は伝えたぜ」

「待てよ」

ニット帽が唸った。血に塗れた右足を押さえ、立つ事も俟たない筈なのに。それなのに、浅間宗佑は立ち上がった。

「てめえには分からねえだろ、分かる筈がねえんだよ。護りたい物も、支えてくれる物も無えから——てめえは間違ってる。間違いを決めるのは俺じゃねえ——それでも、お前は、間違ってる。なあおいエニグマ、人間やめたら只の生き物だぜ」

それこそ。

そんな戯言、世界の真理。

「とっくの昔に知ってるよ。だから確かめるのさ。そいつがどれだけ重要か。それに——支えてくれる物、だって？ 異能者の癖に、何言ってるんだか」

エニグマは歩き出す。すれ違い様、あーちゃんは僕へと言葉を投げ掛けた。

「まこちゃん」

「……待ってろ」

「当然」

「後で説明する。ちゃんと、説明するから。だから、待っててくれ」  
「うん」

「必ず助けるから」

「分かってるって」

必ず助ける。

「カレー、ちゃんと作ってたげるから」

必ず助ける。

必ず。

——本当に？

それは本当なのか？

百パーセントの一なのか？

一パーセントの百なんじゃないのか？

「助けるから」

助けてみせる。

死んで灰になっても、骨だけになっても助けに行ってやる。

「助けるから」

遠ざかる影に向けて。

「——助けるから」

距離が遠すぎて届かない。

返事は無かった。



目を開けても、閉じても、さして明るさに違いは無い。

何も無い。ここには、オレが寄る辺とすべき物が存在しない。

——オレの部屋に陽の光は差さない。

街中の、とある場所。暗い、暗すぎて、そう、まるで閉塞され切った。

「来ると思うかい、篠崎群青」

「……目隠しと手錠、取って貰えませんか？」

「却下だよ。知ってる？　どこか一つの感覚が奪われたら、代わりに他の感覚が発達するらしいぜ。人間ってのはそう出来てるのさ。だから、目隠しプレイをする奴が後を絶たない」

殺す為だけに使ってきた四本の指を、制服の内側に潜らせる。体が僅かに反った。

「特に触覚、ま、早い話が快感神経が発達する訳だけど——」

重い音と共にガリりと開く扉。それが意味するのは、只の勝利。

「んー！」

学生達に連れられて運ばれてきた暦美代子。目隠しに、口元にガムテープ、後ろ手に手錠。所詮は不良の荒仕事、単純に拉致だけを目的とするなら大した技術は必要無い。

——オレの部屋に陽の光は差さない。

「問題は、殺した後さ」

暦美代子。

篠崎群青。

浅間宗佑。

この三人に共通するのは——そう。

「——ハ」

虚偽真を殺すだけならここまではする必要は無い。問題は？成り代わる？という段階にある。言ってしまうえば存在を奪い取る様な物だ。

——オレの部屋に陽の光は差さない。

取り戻す自分が無い。

初めて生まれた時と同じだ。頭が発達し始めた頃には、もう探すべき自分は失った。空白の期間を経て、そして今に至る。本名などとうの昔に捨てた。持っけていても意味が無いから。それはオレの存在を示す物じゃない。

「……だから」

——オレの部屋に陽の光は差さない。





冷静に考えれば餓鬼でも予測出来た。その冷静に考えるというプロセスに入る事が出来なかった。そもそもそんな概念は頭が正常に働いてる時じゃないと出来ない。いつ何処に潜むかも分からない野郎に疑心暗鬼なのに、まして先に足止めされたら、そっちに氣をやる暇が無い。

エニグマという危険因子が殺人鬼という名目を背負っている以上、そこに？常識？という概念は必要ない。人を殺すからこそその殺人鬼？殺人鬼？という言葉自体が持つ異常性——有り体に言うならば非現実性。だからこそそれに気付けない。

真昼間の襲撃。想定し対策出来なくとも可能性の一つ——何も五十や百じゃない。少しばかり頭の隅に置いておくだけで良かったのに。

「お陰でこのザマだ」

またしても病院の一室、安藤先生は溜息をつく氣力さえ無さそうだった。

「言ってる場合かネ。浅間宗佑君——お次はショットガンか？ 俳優にでも転職したらどうだ、スパイ映画の主演になれるぞ」

安藤先生は容赦なく浅間を一蹴する。緊急で病院に担ぎ込まれた浅間の治療。病院も警察ももうちょっと真面目に仕事しろ。撃たれた教師は、多分、もう、ご臨終。

「まあ待ちたまえサヴァン」

抜き足差し足忍べなかった。

「二度に渡って担当医は僕。そして二度に渡って警察は職務怠慢。」

世の中の腐り具合も甚だしいが——そんな事は問題じゃない。自校のグラウンドで生徒と殺人鬼が乱闘騒ぎ——幾らなんでも？常識？外れが過ぎると思うがネ」

避ける間も無く、そして容赦なく飛んでくる平手打ち。下手な素人の殴打より普通に痛い。一気に現実に取り戻された気がした。

「自分が何をしたか分かってるのか虚偽真。殺人鬼と相対したんだぞ？ しかもショットガンを持ったキチガイ——勝てる訳が無い。サヴァンなんて付加価値みたいな後付けの装備が何の役に立つと言うんだ、超能力とは訳が違う」

拉致が明かない。こういう時に真面目性は面倒臭いのだ。

「浅間宗佑、君もだ、君も。撃たれたんだぞ、ショットガンで。警察の銃で撃たれた奴は何人か来た事があるが、ハリウッド級の馬鹿は君が初めてなんだよ」

浅間は歯を食いしばって無理矢理に立ち上がる。こいつは多分、殺されても死なない。

教員、並びに警察の執拗な攻め立てからの逃亡、加えて浅間の治療、安藤先生の説得——それらに要した時間のせいで、現在時刻は既に三時。

ああ、いよいよ余裕が無い。

分かっている。

分かっているとも。

向こうはこっちを霍乱する気にいる。

秒針は現実には忠実に、病身は現実には叛逆する。

「行くぞ浅間」

「分かっているさ」

「待て馬鹿共。君達の身柄は病院が預かってんだから下手に動くな。看護婦総出で抑えるぞ」

——面倒臭い。

「安藤先生、定期健診あんまり行かなくてすいません」  
バチン。

一瞬、安藤先生の、クマに囲まれた目玉。

それに異様な光を見て、躊躇わずに軽く一発。病院だし、まあ、大丈夫だろう。

苦笑して倒れる安藤先生を床に放置する。浅間は信じられないと言った様子でこっちを見ていた。

「……お前」

「強攻策だとしても言いたいのか？ ああそうさ強攻策さとても利口とは言えない馬鹿丸出しの力技さ。けど時間が無いんだよ。このままここに居続けたら何がどうなるか分からない。動き出した頃には大地が無いかもしれないんだ」

「焦るな」

「焦ってない」

「焦ってるだろうが」

「焦ってないって言ってるだろうが！」

ニット帽はやはり立ち上がる。随分と軽症らしい。

駄目だ。頭のエンジンが回る回る。

「落ち着けよ。エニグマの指示があるまでは動かない方がいい」

「何が指示だ、向こうはショットガンなんてギャング御用達の馬鹿みたいな武器を抱えてるんだ、一分一秒どころの話じゃない」

「だから言ってるだろうが。向こうは篠崎先輩と美代子を殺すぐらい何てこと無いんだぜ——分かるか。もうチェックが掛かってんのか、この負け試合は」

ああ。知っている。あの真昼間、あそこで先手を取られた時点で僕らの負けは殆ど決まった様な物なのだ。あと一日、或いは昼間の授業中——僕とあーちゃんが離れた状態でなければ、救う術もあったのだろうか。

「……ならどう動いても一緒だ。歩兵を犠牲に王を取る」

「まだ逆転出切る。相手の陣地に辿り着けば歩兵だって飛車になれる。それまで待て——篠崎群青を助けると誓ったのはお前だろうが。お前が焦燥して自滅してどうすんだよ、ええ？」

分かっている。

僕は——焦っている。

機械として生まれて嘗て一度も体験した事が無いぐらいに——そう、焦っている。

久々に頭に血が上った。深呼吸三回、落ち着かせて脳髓をフル回転。

確かに浅間の判断は正しかった。最初から詰んでいるゲーム。無効が引き金を引けばそれで全て終わる——にも関わらず向こうはこっちを誘い込む。これ程愚かな策も無い。何をするつもりか知らないが——どうせ詰んでいるなら逆転の可能性がある方に擲ってやろう。

それは多分、虚勢なんだろうけども。

何だ。

何が僕を、ここまで駆り立てるのか。

いや、問うまでもない。

人を本気で殺したいと思うこの衝動は、多分。

「……オーケー。落ち着いた。ひとまずナースコールだ」

「ダッシュの準備は良いか？ 手負いの俺に遅れ取んじゃねえぞ」

「そういう時は足負いっつーんだよ馬鹿」

「言ってる」

ボタン一押し、発信されるナースコール。

同時、僕のポケットに振動が生まれた。

「……——エニグマか？」

「……さあ」

非通知設定。詰み試合から逆転する為に、その携帯を手を取った。ボタンを押して浅間にも聞こえる様に大音量にする。

うざったい猫なで声が耳を劈いた。

——もし。

もし既に彼女が死んでいたら。

もし僕らが踊らされているだけだとしたら。

それでも。

もし助けられるのなら。

「If, If」

僕の全てを擲とう。そして全てを取り戻す。

■ 3. END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7805k/>

---

メガロマニアックス——フォーゲット・ミー・ノット——

2010年10月9日02時38分発行